

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第 27 回全国大会和歌山大会
第 18 回青少年国際交流全国フォーラム

報告書

日程：平成 23 年 11 月 26 日(土)～27 日(日)

会場：和歌山マリーナシティロイヤルパインズホテル

【主催】内閣府政策統括官（共生社会政策担当）・日本青年国際交流機構
財団法人青少年国際交流推進センター・海友会

※和歌山県国際交流事業補助事業

◎目次



大会要綱	2
御挨拶	3
大会日程	8
開会式	9
基調講演	10
分科会	12
懇談会	31
和歌山大会テーマソング～ひかりのわ～	34
会場展示	35
表彰式	36
東日本大震災及び	
台風12号による災害復興支援活動報告	38
閉会式	42
和歌山大会を支えたスタッフ	43
地域理解研修	45
保育ルームについて	50
和歌山大会検討の記録	51
アンケート結果・評価	52
参加者名簿	55
協賛	59
あとがき	59

◎大会要綱

青少年国際交流事業事後活動推進大会 日本青年国際交流機構第27回全国大会 第18回青少年国際交流全国フォーラム 和歌山大会開催要綱

1. 目的： 内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。
2. 主催： 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構
財団法人青少年国際交流推進センター
海友会
3. 後援： 和歌山県、和歌山県教育委員会、和歌山市、和歌山市教育委員会、
海南市、海南市教育委員会
4. 主管： 日本青年国際交流機構第27回全国大会和歌山大会実行委員会
5. 協賛： 商船三井客船株式会社
6. 期日： 平成23年11月26日（土）～27日（日）
7. 大会テーマ： つなぐ、育む、輝く命。～紀の国から宙へ～
8. 会場： 和歌山マリーナシティロイヤルパインズホテル
〒641-0014 和歌山県和歌山市毛見1517
TEL：073-448-1111
9. 対象者： 内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年
国際交流事業に関心のある方
10. 参加費：
①大人（中学生以上）
全日程参加 16,000円
懇談会まで 7,000円
分科会まで 1,000円
②子ども（小学生）
全日程参加 12,500円
懇談会まで 3,500円
③未就学児（寝具・食事必要）
全日程参加 9,000円
懇談会まで 2,000円

◎御挨拶

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長
伊奈川 秀和

内閣府の青年国際交流事業は、我が国の将来を担う青年の育成や、青年間の交流を通じた各国との友好親善を図ることを目的として、50年以上にわたり実施されてきました。今回の和歌山全国大会に参加し、初めて様々な既参加青年の方と交流する機会を持ち、私は、国際交流事業に参加した青年の皆様が、本当に、相互につながり、各界や地域で活躍されるとともに、国際交流や青少年育成など様々な社会貢献の取組を活発にされていることを実感しました。こうしたつながりや事後活動こそが、内閣府の青年国際交流事業の特色であり、真価であり、貴重な財産であり、今後も、交流事業の充実とあわせ、事後活動を応援してまいります。

全国大会においては、自らを変えるために毎朝新宿駅東口でゴミ拾いを始め、世界中に取組の輪を広げた荒川祐二さんから、自分から「行動すること」の重要性、そして「人と人とのつながりを大切にすること」について、映像を交えながら、真剣かつユーモラスに講演いただきました。

その後も8つに分かれての充実した分科会が行われました。私も、「120年の絆 トルコ・串本交流の記憶」の分科会に参加し、串本とトルコの間でエルトゥールル号遭難事件以来の交流と友情が生き続け、日本とトルコの親密さの一つの基盤になっていることを学ばせていただきました。

また、東日本大震災の被災3県などからの災害関係の報告を通じて、IYEOネットワークによって、現場のニーズに対応した心のこもった支援が行われたことを実感するとともに、人と人との絆・つながりの重要性を更に強く感じました。

懇談会は、和歌山らしい趣向が凝らされており、参加した事業、世代、地域の枠を越え、皆が一体となって楽しみ、交流を広げ、深められたと思います。

この年に一度の全国大会を大きな成功裏に終えることができたことを心から嬉しく思いますとともに、本大会開催のためにご尽力いただいた林実行委員長をはじめ、実行委員会の皆さん、海友会の方々、地元からご支援をいただいた和歌山県及び和歌山市並びに地元の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

この全国大会で得られた成果をいかし、今後とも、地域社会や職場、あるいは海外において、更に活発な活動を展開していただくとともに、国際交流の輪を大きく広げていただけるよう期待いたします。この報告書が、その一助になることを願っています。

始めの一步を踏み出す勇氣

日本青年国際交流機構会長
大河原 友子

日本青年国際交流機構第27回全国大会が、和歌山県の和歌山マリーナシティロイヤルパインズホテルにて開催されました。地中海を思わせる素敵なリゾート地に、全国から集まったIYEO会員が一堂に会し、大会は盛大に行われました。

基調講演では、「自分を変えたい」という思いから、たった1人で始めた新宿でのゴミ拾いが世界10万人に広がっていったという話を、全身を使いながらユーモアたっぷりに話す荒川祐二さんから聞くことができました。「何かやりたい」と思っている人は沢山いますが、それを形にしていくのは容易な事ではありません。しかし荒川さんのように一步踏み出し、地道に継続することによって小さな活動が世界に発信していくまで大きなものになりうるのだというメッセージは多くの聞き手に勇氣と希望を与えてくださいました。

また、各分科会では8つのコースに分かれ、それぞれ和歌山の魅力を様々な形で学びました。夜の懇談会では50年を超える内閣府青年国際交流事業らしく、幅広い年齢の方、また、様々な事業出身者の方々が参加され、旧友との交流を懐かしみ、新たな出会いでネットワークを広げて友好な交流ができたと思います。

2日目は、東日本大震災及び和歌山の台風12号被災についての発表がありました。地元の方々の生の声を聞きメディアでは伝わってこない各県の置かれている立場や状況が良くわかりました。これから長い年月をかけて復興に取り組まなければいけないという言葉が心に響きました。それと同時に、青年国際交流事業や事後活動で培った人脈、実行力、コーディネート力などが震災支援活動をする際に大変役立ったと聞き、人材育成、人間力など事業の成果がこんなところでも発揮できていることに感心しました。発表後に「それぞれが感じたこと、明日へのメッセージ」を書くことにより、各自が自分の気持ちを整理できたと思います。IYEOとしても世界中からいただいた義援金を現地のために役立てるようまだまだできる事が沢山あると感じました。小さい事でもいいから一步を踏み出す勇氣、そしてそれを広げていく大切さを改めて学ぶ2日間となりました。

和歌山県全国大会が大成功に終了することができたのは、林祐司実行委員長を始めとする関係者皆様のご尽力のお陰です。この場を借りて心より感謝申し上げます。

来年は沖縄にてお会いしましょう。「めんそーれ沖縄！」

和歌山大会報告書に寄せて

財団法人青少年国際交流推進センター理事長
上村 知昭

第18回青少年国際交流全国フォーラム・日本青年国際交流機構第27回全国大会は、和歌山県和歌山市での開催でした。「紀の国」は、「木の国」から転じたとのことですが、太陽いっぱい豊かな緑と輝く海に恵まれて、その自然は「一言で云えば優しい混沌である」と仁坂知事は表現されています。開催会場も明るい海と陽光いっぱいの素晴らしい施設でした。

平成23年は3月11日の東日本大震災、日本各地での集中豪雨や台風上陸等災害続きの厳しい状況の中でしたが、林実行委員長はじめ実行委員、そして海友会の皆さんの熱い思いと惜しみない御努力で参加者は、一般の方々の参加も得て260名を超え、国際交流既参加者の皆さんの絆と事後活動状況を確認しつつ相互研さんを図るとともに、世の方々にも交流事業が如何に意義あるものかを知っていただく良い機会を提供するという所期の目的は十分に達成されたと存じます。実行委員、そして海友会の皆さんの御尽力に深く敬意と謝意を表しますとともに大変嬉しく存じる次第です。

第18回青少年国際交流全国フォーラムは、荒川祐二さんの実体験、まさに勇気ある一歩を踏み出すこと、そしてそれを広く同世代の若者へという叫びに強く心を打たれました。1人の若者の勇気と行動が、小さな波から広く世界へと広がる大きな波になっていくということに感動しました。また、分科会も紀の国にふさわしいテーマやボランティア活動等有意義なもので、参加された皆さんも得るところが多かったことと存じます。この大会・フォーラムでの成果を参加された皆さんの今後の社会貢献活動にいかしていただき、益々御活躍されることを期待し願っております。ここに重ねて実行委員及び海友会の皆さんに深く感謝申し上げますとともに、御支援・御協力をいただいた和歌山県、和歌山市、海南市をはじめ地元の関係各位に厚く御礼を申し上げます。

今日では、どの県でも「ブロック大会」が、そして多くの都道府県で「全国大会」も開催でき、内容も充実し、多彩になってきていることは嬉しいことです。また、IYEOの皆さんが、内閣府青年国際交流事業で招へいされた外国青年の「国内プログラム」等を実施する実行委員会で、その中核となって活動されていることに敬意を表しますとともに、今後とも派遣の経験等をいかされてそれぞれの地元、それぞれの分野で国際性に富み、内外に広いネットワークを持つ青年リーダーとして大いに御活躍され、益々評価を高められることを祈念して「大会の報告」に寄せる言葉といたします。

絆から広がる事後活動

日本青年国際交流機構第27回全国大会実行委員長
林 祐司

日本青年国際交流機構第27回全国大会和歌山大会にご参加いただきました皆様、和歌山へお越し下さりありがとうございます。

2011年は東日本大震災、台風12号による水害など、開催地和歌山を含む全国各地で人の力ではどうすることもできない天災に見舞われ、気持ちが滅入ってしまいがちな一年だったと思います。そんな中で開いた全国大会。そう言った“心の曇り空”に一筋の光を与えてくれる大会になったように思います。

「和歌山らしい大会にしよう」「和歌山大会の実行委員会として何をメッセージとして届けよう」。実行委員会が立ち上がった当初、そう言った議論を重ねてきました。テーマは「つなぐ、育む、輝く命。～紀の国から宙へ～」。大会で出会った人同士がつながり、互いの関係性を育み、事後活動を発展させることで一人ひとりの命が輝いてほしいとの願いから決めました。皆さんは大会中、新しい自分の発見や出会いがありましたか？

大会はあくまで手段だと考えます。プログラムもその手段が具体的な形になって現れたことに過ぎません。要は集まった人同士の「つながりたい」という気持ち、そこから生まれる信頼関係とその発展をどのように展開するか次第だと思います。今大会で出会った人、再会した仲間、深まった絆…。それぞれ一人ひとりにドラマがあり、思い出があると思います。その経験をアルバムにしまうのも皆さん次第、さらに続編を綴るのも皆さん次第です。

この1年間、各地のブロック大会に参加させていただき、各地の郷土の魅力、人の温かさにふれました。本当に「来てくれてありがとう」という熱い気持ちを感じるとともに、和歌山大会は還元できたのだろうかと不安に感じることもあります。しかし、閉会式の壇上から会場を見渡し、皆さんの笑顔を見ていると、「開いて良かった」としみじみと感じ、間違いなくIYEOに集まるみんなの気持ちがまとまった瞬間だと思いました。

IYEOの強みはネットワークです。しかし、コミュニケーションを続けないと、意識は薄れてしまいます。今大会は災害復興支援活動の報告でもあった通り、つながりの大切さを感じた大会だったように思います。大会で結んだ絆を大切に、それぞれの事後活動に生かしてもらえればと思います。

最後になりましたが、大会の準備にご協力下さった関係者の皆様、また、実行委員のみんな、本当にありがとうございます。

和歌山でお待ちしています。

海友会会長
栗山 京子

和歌山の魅力と、大会のテーマである「つなぐ、育む、輝く命」を伝えたい、との思いで準備に励みましたが、ご参加の皆さまには伝わりましたでしょうか。

私はまず、オープニングの和歌山児童合唱団の子どもたちの歌を聴きながら、大会のテーマを感じることが出来ました。「この子どもたちが、健やかに育ち、友だちや家族との関係をつなぎ、育みながら、その命を輝かせて生きていってほしい」。そんな気持ちになり、熱いものが込み上げてきました。今年は東日本大震災や台風12号による水害があり、大変辛い経験をされた方が多い中、偶然にもこの大会テーマに「命」という言葉が入っていました。震災より以前に決まっていたテーマです。提案したのは林実行委員長。何か不思議なパワーを感じます。震災により、IYEOの「つながり」、ネットワークを感じることができた年でもあることを、2日目の活動報告を聞くことで実感しました。これからも、このつながりを大切に、より強いものにしていけたらと願います。

今回、全国大会を行うことで、たくさんの出会いがありました。当日ゆっくりとお話する時間がなかったのが残念ですが、IYEOのメンバーの皆さんとは事前に申込のお問い合わせでメールをしたり、お電話をさせていただいたりすることで、知り合うことができました。そして、和歌山での新たな協力者との出会いもありました。たとえば、分科会講師や、和歌山大学の学生のみなさん。また、会員のつながりで「なつお meets 南風」さんには、大会のテーマソングを作っていただいた上に、懇親会へ生演奏に来てくださいました。大会にとってもぴったりの素敵な歌詞に感銘を受けました。皆様今一度、歌詞をよくご覧いただくと幸いです。CDをご希望の方は私までご連絡ください。

ここまで、私が良かったと思うことを綴りましたが、大会運営にあたり、いいことばかりではありませんでした。報告書の各所で書かれているかと思いますが、行き届かなかった点や、参加者の皆さんにご迷惑をおかけしたことも数々で、反省しきれませんが、初めての大会運営であったこと、若いメンバーの経験の場であったと、大きな心でお許しいただきたく、この場をお借りして心よりお詫び申し上げます。

しかし、本当にたくさんの皆さんに支えられ、盛り上げていただきましたこの大会、感謝することばかりです。何より、4年前の大会で「全国大会を和歌山でやる！」と宣言して下さった先輩方と、この大会を共に作り上げた実行委員の皆さんに感謝しています。みんなのアイデアを持ち寄り、議論し、一つ一つが積み重なり、出来上がりました。この仲間の力がなければ、このような素晴らしい大会はできていません。本当にありがとうございました。最後になりましたが、全国からご参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。皆さんにご覧頂けたのは、和歌山のほんの一部です。南には本州最南端の串本、くじらの太地町、那智の滝、瀬峡、マリンスポーツやパワースポットも楽しめます。今回、高野山や熊野古道に行けなかった方も、ぜひ、また和歌山にお越し下さい。大歓迎で海友会メンバーがお迎えいたします。そしてまた来年、和歌山と海つながりの「沖縄」でお会いできるのを楽しみにしております。

◎大会日程

第1日目・11月26日(土)

- 12:30 受付
13:30 開会式
14:00 基調講演
15:30 分科会
1. 熊野古道～地域遺産から世界遺産へ
 2. 120年の絆 トルコ・串本交流の記憶
 3. 太地の鯨と歴史 捕鯨問題を考える
 4. たま駅長誕生秘話 ローカル電車の未来を考える
 5. 知ろう、残そう! 小さないのちが生きる場所
 6. 和歌山発 市民で創る自然エネルギー
 7. その時あなたはどう動く いのちを守る防災運動会
 8. より社会に貢献できる 事後活動を考える
- 19:00 懇談会

第2日目・11月27日(日)

- 9:00 表彰式
9:30 東日本大震災及び台風12号による災害復興支援活動報告
11:00 閉会式
11:30 地域理解研修
- ① 和歌山市内散策コース 「めざせ!和歌山城天守閣」
 - ② 熊野古道体験コース 「いのりの道「熊野古道」を訪ねて」
 - ③ 和歌山文化体験コース 「漆器の研ぎ出し体験&酒蔵見学」
 - ④ 高野山参拝コース 「霊峰「高野山」で身も心も清らかに」

◎開会式

大会1日目 26日(土) 13:30~14:00 わかのうら

司会：荒井沙友里

- | | | |
|----------|----------------------|--------|
| 1. 開会の言葉 | 第27回全国大会和歌山大会実行委員長 | 林 祐司 |
| 2. あいさつ | 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長 | 伊奈川 秀和 |
| | 日本青年国際交流機構会長 | 大河原 友子 |
| | 財団法人青少年国際交流推進センター理事長 | 上村 知昭 |
| 3. 来賓挨拶 | 和歌山県知事 | 仁坂 吉伸 |
| | 和歌山市長 | 大橋 建一 |
| 4. 来賓紹介 | | |
| 5. 祝電披露 | | |
| 6. 閉会 | | |



第27回全国大会
和歌山大会実行委員長
林 祐司



内閣府子ども若者・子育て
施策総合推進室長
伊奈川 秀和



日本青年国際交流機構
会長
大河原 友子



財団法人青少年国際交流
推進センター理事長
上村 知昭



和歌山県知事
仁坂 吉伸



和歌山市長
大橋 建一



♪ オープニング ♪
和歌山児童合唱団

◎基調講演

大会1日目 26日(土) 14:00～ わかのうら

司会：荒井沙友里 担当：岡室智也 出羽正典

「半ケツとゴミ拾い～たった一人から全世界10万人へ～」

講演者：荒川祐二氏（NPO法人世界護美推進連盟理事長）



荒川さんの基調講演は、ステージを縦横無尽に歩きまわり、大きなジェスチャーを交えた関西弁で今までにないスタイルで、講演を聞いているというか、漫才を見ていると言った感覚で非常に分かり易く、楽しく拝聴させていただきました。

夢や希望を持たずに毎日ダラダラと20年間生活を送ってきた自分に下した評価が「生きる価値なし」だったそうで、裕福な家庭に生まれ、その恩恵を被って幼少の頃から相当裕福な生活を送ってきたといいます。小・中・高・大と欲しいものは何でも手に入り、御馳走を食べ歩き、気がついたころには完全な「ダメ男」に変貌。そんな、完全ぬるま湯につかりきって、夢や目標なんてものには全く無縁で、夢なし、自信なし、希望なしの3冠王のタイトルを奪取した矢先、このままいくと人生どうなるのだろうといった底知れぬ不安を抱くことになったそうです。夢や希望を追いかけ、生き続ける友人をみて、自分もあんな生き方ができたら、といった思いが次第に芽生え始めたそうです。「自分を変えたい・・・」そんな思いが次第に強くなっていきますが、実際そのために何をして良いのかがわからず、ある日、兄から誘われ観た映画が自分を大きく変えるきっかけになったのです。その映画から発せられた、メッセージは「動けば変わる」でした。

そのメッセージが、毎朝6時から新宿駅東口を掃除するきっかけになりました。どうせやるからには特別なことをやってみようとの思いから、新宿駅東口を「一緒に掃除してくれる人募集！！」と書かれたダンボールの看板を背中に背負いながら1人黙々と掃除をしました。通勤途中のサラリーマンに暴言をはかれ、集めたゴミを蹴り飛ばされるなどの、紆余曲折の辛い日々を乗り越え、「いつもありがとう」と優しく声をかけてくれる人や、掃除を手伝ってくれる人が次第に増え、3か月後には50人以上へと拡大、掃除を始めて半年後の2007年5月3日（護美の日）には、全国で一斉にゴミ拾いを開催し全国27か所、総勢444人を集めるまでになりました。その語る荒川さんの口調は、何年か前に「生きる価値なし」と評したのが、嘘のようで、夢と希望に満ち溢れた表情に、会場の聴衆は話に魅了され、心を驚つかみにされているように感じました。そして、質疑応答の時間では沢山の方が挙手し、

荒川さんはとても丁寧に、その質問に答えていました。回答の中で、辛い時「ゴミ拾いを諦めないでよかった」と話されたことが、シンプルながら心にとまりました。誰でもそうですが、出来ない理由をまず探し、自分で自分に壁を作っています。荒川さんが教えてくれたのは、大事なことは、今、この瞬間に一步踏み出すことです。未来は誰にもわかりません。一步踏み出したからといって、一日先に何かが変わっているということはないかもしれません。しかし、その思いを続け挑戦することで、無限の可能性が広がり自分の中で間違いなく何かが変わるはずだということです。今回の荒川さんの講演を聞いた人すべてが、今この瞬間に、一步踏み出す勇気を持つことができ、その選択がかけがえのないものになると信じ、基調講演の報告とします。



■基調講演者プロフィール：荒川祐二氏

1986年、大阪に生まれる。大阪の中学、高校を卒業し、上智大学に入学。その後、大学時代に1本のドキュメンタリー映画を見たことをきっかけに、「自分を変えたい!」という思いで、毎朝6時から日本一汚い場所と思った新宿駅東口の掃除をたった一人で始める。3か月後には50人以上へと拡大し、掃除を始めて半年後の2007年5月3日(護美の日)には、全国で一斉にゴミ拾いを開催。全国27か所、総勢444人を集める。

2009年5月3日には全国200か所、全世界26か国、総勢15,534人、2010年5月3日には『100万人のゴミ拾い』を開催。2006年、たった一人から始まったその活動は、全国300か所以上、全世界30か国以上、総勢10万3,036人という全世界ムーブメントに広がっていった。

大学卒業後、NPOでのゴミ拾い活動を継続する傍ら、自身の体験をもとにした執筆活動、講演活動を全国各地の教育機関、企業、団体で行っている。

- 荒川祐二公式ホームページ：<http://arakawayuji.com>
- 荒川祐二オフィシャルブログ：<http://ameblo.jp/yuji-arakawa/>

記：岡室智也 出羽正典

◎分科会

No.	分科会名	内容
①	熊野古道～地域遺産から世界遺産へ	2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として高野山と共に世界文化遺産に登録された熊野古道。世界遺産登録に向け、市民活動家として活躍した小野田真弓さんと講師に招き、登録への経緯や古道の魅力を伺います。
②	120年の絆 トルコ・串本交流の記憶	120年以上前、和歌山県の串本沖でトルコ軍艦が難破。住民たちが救済に尽力したことから、現在もトルコと串本の友好は続いています。「日常の中にある国際交流」について、トルコ・串本の例を学びながら考えます。
③	太地の鯨と歴史 捕鯨問題を考える	捕鯨文化について考える分科会。国際的に捕鯨について賛否両論に分かれる中、長い歴史の中で地元の漁師や暮らしてきた人々は、鯨といかにかかわってきたのか、それらの歴史と紐解くことで見える異文化理解について新たな視点を探ります。
④	たま駅長誕生秘話 ローカル電車の未来を 考える	一時は廃線の危機にさらされた和歌山のローカル線「貴志川線」。市民運動が大きな社会的ムーブメントになり、結果として存続に成功した経緯を聞き、貴志川線を支える人たちの思いや生活を守るための市民運動の意義を考えます。
⑤	知ろう、残そう！ 小さな命が生きる場所	近畿最大級の干潟、和歌浦には多様な生物が生息しています。中には絶滅危惧種に指定されたカニ類や貝類も生息しており、人と自然の共生を動物たちが教えてくれます。今回はこの干潟を長年研究する和歌山大学の古賀庸憲教授を講師に、干潟の自然について学びます。
⑥	和歌山発 市民で創る 自然エネルギー	東日本大震災を受け、エネルギー分野への関心が高まっています。そんな中、市民レベルで市民自身が当事者となってエネルギーを創り出す事例が見られるようになってきました。日照時間の長さや山地、海辺などそれぞれの地域性に合った市民協働発電について学びます。
⑦	その時アナタはどう動く いのちを守る防災運動会	地震への備えはハードだけではなくソフトも重要だということを、東日本大震災では改めて感じさせられました。この分科会では、「いざ」という時に反射的に行動ができ、さらに身近な物を使って被災時に役立つノウハウを身体を使いながら学ぶことができます。
⑧	より社会に貢献できる 事後活動を考える	今年、40周年を迎えた海友会は、内閣府青年国際交流事業の既参加者だけでなく県単位で実施する派遣事業の帰国者も活動しています。個人レベルでの活動から県域に広がった活動など、全国でも比較的活発な活動が続いています。活動の事例を交えながら、事後活動の在り方について考えます。

①熊野古道～地域遺産から世界遺産へ

大会1日目 26日(土) 15:30～17:30 わかやま館 会議室1

担当：田伏志保 安田はなこ

■講師：小野田真弓氏

「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会

■参加人数：49名

■ねらい：

和歌山県が誇る世界遺産・熊野古道を身近に感じてもらい、遺産を遺す大切さを伝えたい

■講義内容：

まず初めに、この分科会が決まった後に、平成23年台風12号被害により熊野古道が甚大な被害を受けました。当初内容としては、講義場所であった神社から、海南周辺の熊野古道に重点をおいてのお話となる予定でありましたが、被害によって、未だ回復していない和歌山の遺産の被害についての話を加える事になりました。また、本来ならば、講義場所自体も熊野古道の一部を体感しながらの予定でしたが、提供神社での講義が出来なくなった為、会議室での講義となりました。



この分科会に参加する方はみな、熊野古道に対して想いの強い方が多く、講師としてお招きした、小野田さんも自然と熱の入る講演となりました。



視点から分かりやすい説明がなされました。

主な講義の流れとしては、プロジェクターを使い、分かりやすい地図や写真を用いて、世界遺産熊野古道とは何か、歴史上の人物（平清盛等）がどのような思いを抱き、どのようにして参拝したのか、また、そもそも世界遺産とはどのようなものを言うのかから始まり、どういう風にして、どのような人が関わり、沢山の人の協力の下で遺産登録につながったのかまでを、実際にプロジェクトで中心になり働きかけを行った人物ならではの

かなり深い事情や裏話も組み込まれ、参加者は熱心に聞き入っていました。

そして、台風被害を受けた古道の具体的な場所や、状況も、メディアにはほとんど出なかった現地写真も踏まえて説明され、大切な遺産が受けた傷、崩れ落ちた山々の無惨な光景を前にして参加者の中にはその姿に深いため息をつくものもいました。

最後の質問コーナーでは、熱い参加者から再度の細かい説明を求める声もあり、初めから終わりまで、力のはいる分科会でした。

この分科会を通じて一層世界遺産に対する情熱をもって頂きたい、そんな思いまで感じることができたのではないのでしょうか。

熊野古道に関する詳細については、

「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会HPまで

<http://www.jtw.zaq.ne.jp/kumako97/>

■講師プロフィール：

小野田真弓（おのだ まゆみ）氏

和歌山県世界遺産マスター

熊野古道を世界遺産に登録するプロジェクト準備会 運営委員代表

1965年和歌山生まれ 国士舘短期大学国文学部卒業

97年、熊野古道を世界遺産に登録するプロジェクト準備会を発足。

和歌山県ベンチマーク審議委員、和歌山県河川審議委員などを務める。



記：田伏志保

② 120年の絆 トルコ・串本交流の記憶

大会1日目 26日(土) 15:30~17:30 わかやま館 会議室302号

担当：芦口正史 長尾 進

■講師：西畑栄治氏
南紀国際交流協会会長



■参加人数：30名

■ねらい：

120年以上前、和歌山県の串本沖でトルコ軍艦が難破。住民たちが救助に尽力したことから、現在もトルコと串本の友好は続いている。「日常の中にある国際交流」について、トルコ-串本の例を学びながら考える。

■講義内容：

1890年、トルコ軍艦エルトゥールル号が横浜から本国トルコへと出航した。当時日本では疫病が流行っており、台風シーズンだが早めに出航する必要があった。だが、修理された木造船は大島檜野崎沖で9月16日、嵐の中遭難した。夜9時半から10時頃だったといわれている。幸い近くに灯台があり、灯りをたよりに40mの崖をよじのぼり灯台守に助けを求めた。言葉が通じない中、万国旗マップをたよりに国を伝え、まだ多くの仲間が遭難している事を伝えた。



島民による救出活動、寒さで凍える船員を裸で抱きかかえ寒さをおさえ蘇生した。正月用にとっておいたお米、にわとり、また来年用の種もみまで調理し食べさせた。浴衣、寝具なども提供し、治療費も請求しなかった。650余名の内、献身的な救助の結果、69名の命が救われた。

その後、建設された石造りの慰霊碑は、地元大島の小中学生が清掃し、芝を刈って花を植え、地元住民と共に守っている。5年に1度行われている式典の日には、必ずと言っていいほど雨が降り、終わると晴れてくるため、亡くなった方々の涙雨だと言われている。近くにはトルコ記念館が建てられ、エルトゥールル号の歴史は後世に語り継がれている。

トルコ人は親日家が多いと言われており、ヤカケント町には串本広場が、エルトゥールル号の母港メルシン市にはメインストリートに串本通りがあり串本と同じ形の慰霊碑が建てられている。1985年イランイラク戦争の時には、テヘランに取り残された215名の日本人がトルコ政府の手助けにより全員無事に国外脱出することができた。

現在、エルトゥール号の引き上げ調査、エルトゥール号の遺品里帰り、またトルコ国民と串本町民の青少年交流、ホームステイ事業などが盛んに行われている。120年前の出来事が後世に受け継がれて、日本トルコ間の人類愛、人間愛、宗教も文化も違う中での深いキズナとなって繋がっている。涙ぐむ参加者もあり、あらためて考えさせられる分科会であった。



南紀国際交流協会は、串本町とトルコとの友好訪問団派遣事業を支援する一方、毎年トルコ姉妹都市との間で青少年団相互派遣事業を継続している。西畑栄治氏は、同会の前身である串本町国際交流協会当時より10年以上会長を務められており、地元高校生引率でのトルコ訪問、歓迎レセプション開催、ホームステイの手配、各種講演会など通じて絆をつなぐ活動に尽力されている。

■講師プロフィール：

西畑栄治（にしばた えいじ）氏

南紀国際交流協会会長

南紀国際交流協会は、串本町が主体となって進めてきた国際交流活動を支援する一方、自治体間交流にとどまらない民間レベルでの国際交流を促進する活動を行っています。協会は串本町とトルコとの友好訪問団派遣事業を支援する一方、毎年トルコ姉妹都市との間で青少年団相互派遣事業を継続しています。西畑栄治氏は、同会の前身である串本町国際交流協会当時より10年以上会長を務められており、地元高校生引率でのトルコへの訪問、歓迎レセプション開催、ホームステイの手配、各種講演会など通じてトルコとの絆をつなぐ活動に尽力されております。

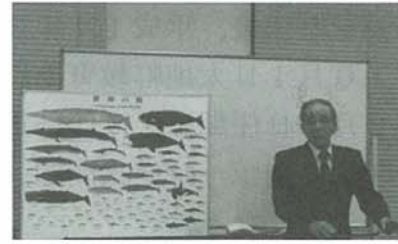
記：長尾 進

③太地の捕鯨の歴史 捕鯨問題を考える

大会1日目 26日(土) 15:30~17:30 わかやま館 会議室304号

担当：出羽正典 宮本晋司

■講師：北 洋司氏
元太地町教育長 元鯨博物館館長



■参加人数：35名

■ねらい：

捕鯨問題を通して、一面的な考え方ではなく、双方の歴史や文化を認識し、加えて国際的な枠組みの中での議論が、現在のグローバル社会に必要であることを認識する一助となることをねらいとする。

■考察：



太地町をはじめ国内の沿岸捕鯨継続地域は、日本国の法律のもと各県の捕獲調整を受け指定された漁期に操業しており、無法状態で操業しているものではない。にもかかわらず毎年漁期には、反捕鯨団体が漁業者の作業を妨害し、平穏で安全な地域住民の暮らしに不安を与え、時には暴力的行動や人権侵害的発言を無抵抗の漁業者に向けている。この現実は、日本国に対する主権の侵害であり、太地町は住民の生活権を守る戦いになっている。和歌山県は本年漁期より、県警、海上保安部が毎日警備活動を行っており、漁期の無事を願っている。一方的な国益重視の外交や政治的手段としてのメディアを利用した背景や、資金の提供を含めた反捕鯨団体への活動支援がみえてくるわけであるが、太地町の捕鯨の歴史は長く、地域の文化であり生活の糧である。一面的価値では解釈や解決ができるといったものではない。その中で、一定の制約のもとで漁業をしているため、今後も太地町の歴史と文化が捕鯨を中心に活躍していくと考える。このような問題は、社会状況によって、勝手気ままに、いつの日か、無かったことになってしまうのではないかと。したがって、正々堂々と生活していただき、一刻も早い反捕鯨団体の理解と協力を得られるように国や県は太地町を守ってほしい。

■受講者からの声：

- ・人は生きるためには他の命を犠牲にしています。その命を無駄にしないようにしなければいけないと思いました。また命を頂いていることを感じて食していこうと思いました。子どもにも伝えたいです。(30代女性)
- ・捕鯨の歴史がよくわかりました。実物のひげや歯を実際に手にとって見て、鯨の大きさを改めて実感することができました。(20代男性)
- ・鯨の問題は多くのものに関わっていることがよくわかりました。勉強になりました。(30代男性)

■講師プロフィール：

北 洋司（きた ようじ）氏

昭和16年12月31日生まれ 66歳

和歌山県太地町出身、同町在住。

昭和35年4月太地町役場に就職、総務課長、企画課長、秘書課長、くじらの博物館官庁、議会事務局長を歴任後、平成14年3月末に退職。

平成16年10月1日太地町教育委員会教育長に就任。

平成23年2月7日任期満了に伴い退任。

企画課長時代に捕鯨一時中止問題（捕鯨モラトリアム）がおこり、1985年からこの問題を担当することになった。

なぜ捕鯨禁止なのかという疑問にたいして自分なりの勉強を始めた。

太地町の捕鯨の歴史文化と伝統、日本の食文化、南氷洋捕鯨の過去実態、IWC加盟国の構図、捕鯨禁止の根拠、環境問題と捕鯨問題など多岐にわたった勉強が必要であった。

特にくじらの博物館館長当時、京都市においてIWC年次会議が開催され、加盟各国政府関係者、報道関係者、クジラの科学者など多くの方が来館し、賛成論者と反対論者に真剣に対応した。

捕鯨問題について多くの経験をしたが、このことを是非多くの人に伝えたいと思い依頼があれば何処へでも講演にでかけている。また、小・中・高等学校の環境教育の題材として捕鯨問題を活用し和歌山県内を中心に臨時講師を努めた。

滋賀県では、「琵琶湖博物館」の館長と対談をし、琵琶湖博物館の広報に掲載された。

現在も活動を継続しており、大学生の卒論指導、学校の臨時講師、町の語り部の養成（平成17年4月より）などを行っている。

記：宮本晋司

④たま駅長誕生秘話

ローカル電車の未来を考える

大会1日目 26(土) 15:00~17:30 わかやま館 会議室304号

担当：芝本和己 大田裕之

■パネラー：木村幹生氏 貴志川線の未来を“つくる”会 副代表
麻生剛史氏 和歌山電鐵株式会社 総務課
コーディネーター：芝本和己 和歌山市議会議員 海友会

■参加者：22名

■ねらい：

南海電鉄の貴志川線撤退を受け、地域住民が立ち上がり、行政、議会、各種関係者を交えて存続に向けた取り組みを行ってきた。その中心になったのは市民が立ち上げた「貴志川線の未来を“つくる”会」。行政とどのように協働して存続に取り組み、現在に至ったのか。市民ができること、すべきこと、取り組んできたその「想い」を知るとともに、これからの行政との在り方、公共交通機関の在り方を考える機会とした。

■講義内容：

事業引継ぎまでの経緯

貴志川線は、和歌山市とその近郊の紀の川市貴志川町を結ぶ、14.3kmの路線。その歴史は、大正5年、沿線三社への参詣客をはじめとした貨客輸送を目的に、軽便鉄道として開業したことに始まります。

しかし他のローカル線と同様、モータリゼーションの到来により、昭和40年代後半をピークに利用者は年々減少、45年間に渡って運行してきた南海電鉄は、平成15年に廃止を表明しました。

これを受け、立ち上がったのが沿線住民。この自立的な存続運動は、他に例を見ないほど大変な広がりとなり盛り上がりを見せ、その中心となった住民団体「貴志川線の未来を“つくる”会」の会員数は最大で6千人を超えました。

これが強力な後押しとなって、沿線の和歌山市、紀の川市（当時は貴志川町）、そして和歌山県は、公設民営により、第三セクターではなく民間単独出資で経営責任を明確に、という原則のもとで支援のスキームづくりに尽力し、全国初の後継事業者の“公募”によって、現在の和歌山電鐵に引き継がれました。

再生の為の取り組み

①「いちご電車」運行開始（平成18年8月）

いつまでも使っていただきたい、という再生への願いが込められています。改装費用はサポーターから数ヶ月で1千万円ものご協力を頂きました。駅に足を運び支援に来て下さる姿は関係者にとって信じられない光景だったといわれています。

②「たま」貴志駅長就任（平成19年1月）

合理化で無人となった貴志駅の駅長として任命。その駅長の業務は、「客招き」。あっという間に全国、海外で知られる人気者に。今では和歌山県勲功爵、常務執行役員の肩書きを持つスーパー駅長です。

③「おもちゃ電車」運行開始（平成19年7月）

車内にはおもちゃのショーケースやガチャガチャなど、遊び心が満載の電車。デビュー当時にはガチャガチャの商品があっという間に売り切れ、走る電車の中、お客様の前で補充したことも数知れず・・・。

④「たま電車」運行開始（平成21年3月）

電車の外には101匹の「たま駅長」、そして車内にはベンチ、背もたれ、床や壁、いたるところに猫がいっぱい！の電車です。ここでも、全国の皆様からサポーターとしてご支援を頂きました。

⑤貴志駅リニューアル（平成22年8月）

「木の国」和歌山にふさわしい、世界で唯一、檜皮葺きの猫の顔をした駅舎です。待合室の「たまカフェ」では、地元紀の川市のふんだんな果物を生かしたジェラートや生ジュースが味わえます。

まとめ

支えているのは「貴志川線の未来を“つくる”会」を中心とした物心両面にわたる熱意と支援です。各種イベントから、多客時の整理、駅の大掃除、電鉄グッズの販売まで、電鉄と一心同体になって活動しています。この会がなければ、またその活動が本物でなければ、貴志川線再生は進まなかったでしょう。

そして貴志川線運営の中心となるのは「貴志川線運営委員会」です。毎月1回、これらのメンバーが集まり、さまざまな意見交換、情報交換を行っています。

自治体の皆様にも補助事業等に関する協議のほか、沿線のさまざまな問題の解決に向け、力強いご支援、ご協力を頂いています。

関係者の物心両面からの取り組みが、現在の貴志川線を作り上げました。

記：芝本和己



⑤知ろう、残そう！

小さいのちが生きる場所

大会1日目 26日(土) 15:30~17:30 万葉館

担当：久保文子 船本健正

■講師：古賀庸憲氏 和歌山大学教育学部教授

■参加人数：14名

■ねらい：

和歌浦に生息する干潟特有の生物について学ぶ事で、普段は気にしない何気ない場所にも沢山の生物がいる事に気付き、生き物や自然環境について考え直すきっかけとする

■講義内容：

最初に古賀先生は、生物が多様で希少種も多い和歌浦の干潟に感激したとおっしゃっていました。和歌山県には、環境省の日本の重要湿地500に選ばれている干潟が10ヶ所あり、中でも和歌浦の干潟は関西で最も広く、全国有数の生態系豊かな干潟ということです。

では、干潟とはどういう場所か。

「潮が満ちているときは海面より下に沈み、潮が引くと干上がり現れてくる、砂や泥が広がっているところ」ということです。

干潟は内湾にあるため、外洋に面した磯のように砂や泥の粒子が流されずに堆積します。このため、川から流れ込んでくる動物の死骸などの栄養分が堆積し、それが干潟の生物の生活サイクルの中で利用されることによって、海の環境が良好に保たれるそうです。

川から流れ込む栄養分を養うためには、上流の森を良好に保つ必要があるため、和歌山県那智勝浦町では、漁業協働組合が、海の環境を守るだけでなく、栄養分の供給源である森を守る運動も行っているということです。

しかし、川の上流にダムを造ってしまうと、せっかく森から供給された栄養分がダムで溜まってしまい、ダムの底に溜まった物は、酸素不足のためうまく分解されず、ヘドロとなって堆積してしまいます。これに気付いたアメリカでは、20年前から新たなダムの建設はしておらず、逆に準備が整った所から撤去しているそうです。

次に古賀先生は、干潟にはどのような生き物が生息しているのか紹介してくれました。



○コメツキガニ

砂の表面のコケを取って食べる。砂泥の表面に堆積した有機物を小さくし、分解に貢献している。

○アサリ

水管を2本持っていて、片方から水を取りこみ、水中の栄養分や酸素を吸収した後、水を排出する。この活動が、水質浄化につながっており、例えば、濁った水が入った瓶にアサリを入れておくと、ほんの20分程度で水は透明になる。



○ゴカイ

環形動物であり、有機物を食べて分解する。また、穴を掘って干潟を耕すため、酸素が砂泥の中に入るのを助ける働きもしている。酸素を供給し、酸化を促している証拠に、ゴカイの通った穴の周囲の砂泥は、酸化により茶色に変わっていることが分かる。

○ハクセンシオマネキ

片方のハサミを上下左右に高く振って求愛行動をする様子が、白い扇を振っているように見えるのでこの名前が付いた。日本では繁殖期の夏にこの行動が見られる。

○ハゼとサギ

ハゼの仲間は、サギなどの高次捕食者から逃れるために保護色となっている。しかし、サギ類は、干潟の中に立ってじっと機会を伺い、ハゼなどの魚をうまく捕食する。

このように、生物どうしの「食う・食われる」の関係は食物連鎖と言い、自然界では何本もの食物連鎖が複雑な網の目のようからまわりあっている事から、これを食物網と言う。



干潟に生息する様々な生物の生態を学ぶ中で、食べる・食べられる・隠れ家を作る・求愛行動をするといった、それぞれの生き物の当たり前の生活スタイル自体が、干潟の環境を保全することにつながっているということが良く分かりました。

特に、干潟の生き物の営みによる環境浄化作用を下水処理施設に換算すると、その能力は、1000haの干潟で、処理人口10万人の下水処理施設に相当し、巨大な経済効果があるということに驚きました。

講義終了後、参加者からいくつか質問がありました。

○参加者からの質問

Q：干潟には何種類ぐらいの生物がいますか。

A：和歌浦は1haで約280種です。東京湾は800haで約70種という事からも分かるように、和歌浦は非常に種類が豊富です。

Q：失った干潟を元に戻すにはどのくらいかかるのですか。どんなことをすれば良いですか。

A：何もせずに自然の状態で置いておけば、数年で戻るでしょう。例えば干拓事業を行った諫早湾でも、水門を全て開ければ勝手に元に戻ります。

Q：(岩手県から参加された方より) 津波の被害を受けた干潟は元に戻るでしょうか。

A：仙台の蒲生干潟では既に回復の兆しがあります。地震や津波の影響で、今後新たに住宅が建てられないような場所では、新しい干潟が出来る可能性もあります。

古賀先生は最後に、「干潟は子供達が自然と触れ合う場として大切です。子供は遊ばないとかしくなりません。どんどん自然に触れる機会を増やしてあげてください。和歌浦では定期的に干潟観察会を行っていますので、是非参加して下さい。今回の分科会を通して、参加者の方々が自然に興味を持つ事で、今後の環境保全に繋がる事を願っています。」とおっしゃっていました。

今回の分科会は、参加者が身近な自然環境について見直すとても良い機会になったと思います。私自身も今日の講義をきっかけに、干潟や里山や水田といった身近な自然環境に、もっと積極的に目を向けてみようと思うようになりました。

■講師プロフィール：

古賀庸憲（こが つねのり）氏

干潟のカニ、特にシオマネキの仲間やコメツキガニなどのスナガニ類の多様な交尾行動や闘争行動、その他の生態や、巻貝やカニなどの中間宿主を利用する寄生虫（二生吸虫類）が生物群集や生態系の中でどのように位置づけられるかをテーマに研究。

2008年度 第1回日本生態学会大島賞受賞。

多数の高校、大学で干潟や生き物についての講義を行い、和歌浦で一般市民向けの干潟観察会も行っている。

記：船本健正

⑥和歌山発 市民で創る自然エネルギー

大会1日目 26日(土) 15:30~17:30 わかやま館 会議室306号

担当：田中美奈

■講師：安原克彦氏

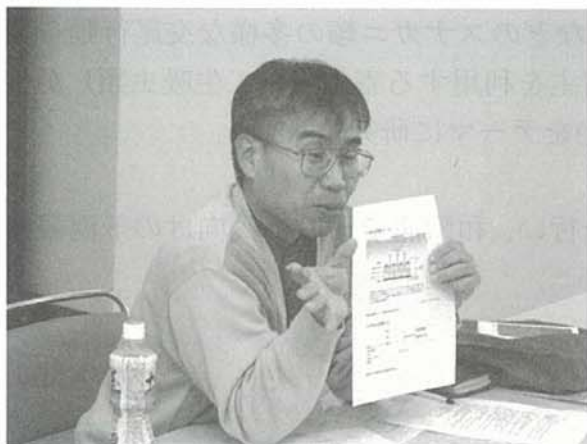
(有)熊野鼓動の工場長 紀南地域地球温暖化対策協議会会員

■参加人数：13名

■ねらい：

自然資源を利用した新たなエネルギーを市民出資で創出する意義とそのための方法や課題について考える。

■講義内容：



初めに自然エネルギーの基本的な発電の仕組みや、和歌山で利用可能な太陽光、小水力、木質バイオマスの3つについて、市民共同発電の実績や想定設置コストなどを説明して頂きました。

また、発電事業のために市民で出資しあうことは、国や自治体から補助金をもらったり、民間金融機関から融資を受けたりするのは異なる方法で、補助金や融資を利用した産業の育成や経済効果などとは異なる成果が地域住民にとって期待できるとのお話もありました。

今回の分科会は、その成果について考えようということも1つのテーマになっていましたが、市民で出資しあって発電するにはどのような方法や課題があるか、そして実際に市民で発電事業を行っている事例について、活発に意見や質問などが出ました。

「市民が参加できる発電というと、やはり太陽光発電が一番思いつきやすいが、一人の人の高額の出資が必要になる。たくさんの方が小額ずつ出資することによって、自然エネルギーが普及する」という安原さんのお話や、「京都には地域住民からの寄付によって発電事業を行うNPOがあり、『環境活動は自分たちの力で行うことが大切』という意識が広まってきている」と参加者からの事例報告がありました。多くの人に関わる活動が地域住民の意識を変えていくことにつながるという点は、市民共同発電をすすめる上で重要なポイントだと理解できました。



ただ、なかなか自然エネルギーを広めるのは簡単ではなく、「自然エネルギーに変えていこうと思うなら、エネルギー以外に政治や経済などのことも考えていかないといけない」という課題も改めて見えてきました。

また、和歌山では自然エネルギーの普及に向けてどのような取り組みが行われているのか、という質問があり、和歌山大学と紀南地方などのいくつかの地域が連携して行っている小水力発電や、植林地の間伐材を利用した木質ペレットやチップなどを燃料にして地元の温泉施設などに利用していることなどが紹介されました。



これからの時代は、化石燃料に依存した暮らしからの脱却が必要になってくるだろうという共通の認識を持ちつつ、やはり、どれくらいコストがかかるかという点が、自然エネルギーを普及させていく上で大切なポイントになってくるだろうという意見が多く出ました。

化石エネルギーから自然エネルギーへの変換も大切ですが、エネルギーをできるだけ使わないようにする「省エネ」や、地域で使うエネルギーはその地域でつくる「エネルギーの自給自足」も大切なのでは？という意見もありました。そういった、新しい価値観や未来のビジョンをつくっていくことが、これからの日本にとって大切だという認識をみんなで持つことができたいと思います。

参加された方の中には、エネルギー関連の会社に勤める方もおられました。仕事以外で活動されている方、特に詳しいという訳ではないけれどエネルギーに関心があるという方など、様々な方がおられました。I Y E Oのつながりの中で、それぞれの取り組みや考えをお互いに知ることができ、今後の新たな展開につながっていくきっかけになったのでは、と思います。



■ 講師プロフィール：

安原克彦（やすはら かつひこ）氏

1964年 大阪生まれ

1986年 信州大学理学部生物学科卒

1991年～（株）らでいっしゅぼーや 有機農産物・無添加食品の流通にたずさわ

2003年～（株）森のエネルギー研究所 木質エネルギー等自然エネルギーのコンサルティング

2006年～本宮町に移住 地元の食材を使った食品加工所（有）熊野鼓動の工場長
紀南地域地球温暖化対策協議会会員

記：田中美奈

⑦その時アナタはどう動く

いのちを守る防災運動会

大会1日目 26日(土) 15:50~17:30 海南市立黒江小学校体育館

担当：上森成人 新谷伊珠美

■実施団体：和歌山市青年団体協議会

■参加人数：27名

■ねらい：

大地震・台風など、いつ起こるかわからない「いざ」という時に役立つ防災のノウハウを身に付け日常に取り込むためには、楽しく学べるのがよいと考え、『防災運動会』という形を通じて体験しながら学び、防災への意識を高めるとともに、周囲の人と協力して「いざ」という時に備える意識作りをする。

■講義内容：

最初に、今回の防災運動会の競技に盛り込まれた3つの技術を学びました。

毛布担架

毛布1枚と丸太2本を使い、毛布の間に丸太をはさみこむように毛布をたたみ、上に人が横たわると人の重みでうまく毛布と丸太が固定され担架になります。

三角巾

三角巾には、体のあらゆる場所をうまく包み込む方法があります。今回は、三角の布を細長い包帯の形にたたみ患部へ巻いたり、腕の固定の仕方を学びました。

ロープ結び

ロープ結びにも、用途に応じて様々な結び方があります。今回は、木や杭、竹などにロープを結びつける「まき結び」を教えてもらいました。



毛布担架作り



三角巾



ロープ結び

参加者の方の大半は不慣れなようで、講師の方の手の動きをじっくり見て真似てみたり、あるいは講師の方に直接手を取ってもらい指導していただいたりしていました。どなたも納得のいくまで質問したり何度も繰り返し練習したり、お互い教え合ったりと和やかな中にも真剣な面持ちで臨んでいました。

この分科会を担当していただいた和歌山市青年団体協議会のメンバーには、ボーイスカウト、ガールスカウトの指導者も含まれていて、普段から様々な技術を実際に野外活動で利用したり、子どもたちに指導するなどしている方から直接教えていただき、実際の様々な場面でどんな危険が考えられるか、そのためには何に気を付けて行わなければいけないのかなど、なるほどと思う説明を受けることが出来ました。

すべての講習を受けた後、参加者は5名ずつのチームに分かれ、その中で患者1名、毛布担架作り2名、三角巾2名と担当を決め、各ポイントをまわりゴールまでの時間を競うチーム対抗戦と、全体を大きく紅白に分けて各組のチーム合計タイムを競う紅白戦の競技を行いました。

まず、スタート地点で担架を作り三角巾を患者役に装着、審判のOKが出れば4人で掛け声をかけて担架を持ち上げスタートします。途中障害物を避けつつ次のポイントへ。そこでロープを使いペットボトルにまき結びで正しく結びつけた後、的に入るまでペットボトルを放り投げます。的に入れば、また担架を持ち上げスタート地点に戻りゴールとなります。

競技の中にペットボトル投げを入れたのは、実際に今年和歌山で、池でおぼれた子どもを助けるために空のペットボトルを数本投げ入れて、近くに落ちたペットボトルを浮き輪代わりにして子どもが助かったというニュースがあり、それを参考にしました。いざという時には身の回りの物でどう対処出来るか、1つでも事例を知っておくと何かの時にきっと役立つはずです。

参加者の方からは、「防災に関心があって地元で活動しているけれど、今回のような具体的な技術は学んだことがなかったので、とても勉強になった。」という感想や、「初めて経験してとても勉強になった。でも、いざという時に対応出来るためには、日頃から防災技術に慣れ親しんでいくことが大事ですよ？」という声に対して講師のボーイスカウトの方からは、「その通りで、自分たちも日頃の訓練をしていなかったら、出来ていないでしょう。」というやりとりがありました。

今年は東日本大震災があり、防災への意識が高まっていると思います。今回の体験を持ち帰り、家族・友人・地域の方々または他の団体とどう協力していくかを考えたり、防災への知識をどんどん増やしていただけたらうれしいです。

■担当団体：

和歌山市青年団体協議会

当団体は、和歌山市に拠点を置く、和歌山青年会議所・ボーイスカウト・ガールスカウト・和歌山市BBS会・海友会和歌山ブロックからの5団体からなり、それぞれ連携し青少年の育成に取り組んでいます。



⑧より社会に貢献できる 事後活動を考える

大会1日目 26日(土) 15:30~17:00 わかやま館 会議室306号

担当：高垣晴夫 前岡妙子

■助言者：山崎佳彦氏

米国派遣（昭和51年）元海友会会長（第10代）

糸我地区青少年育成会前会長

■参加者：18名

■ねらい：より社会に貢献できる事後活動のアイデアを共有して大会にアピールする

■講義内容：

①海友会の事後活動紹介（5分）

●派遣事業

内閣府青年海外派遣事業、韓国派遣、オーストリア青年交流派遣、デンマーク写真展、兵庫洋大

●受入事業

内閣府関係、オーストリア青年交流、在日外国青年との交流事業、バーベキュー大会

●講演事業

海友会40周年記念講演会開催、民族料理教室

●クラブ活動

海友会 dance team 楽舞和

バルーンバザール（風船）

●首長・議員交流事業

交流会の開催

●その他（過去の事業含む）

ビタミン剤を送る運動、PHD運動、日韓野球大会、中国（山東省）との交流事業（自転車、パンダ）、災害支援活動（阪神淡路大震災、東日本大震災、台風12号等）、各種講師派遣、自治体各種委員の推薦、ホームページの運用、専従事務局の設置

●リエゾン事業

公開討論会、防災運動会、やっちゃん祭り、大晦日の鐘撞き（平和の鐘）、ウォータージェットスクリーン映画会、「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会、資金支援システムの構築、ナショナルトラスト運動、ユニバーサルスタジオ誘致（ポルトヨーロッパに）、「はやぶさ」展示、ユニバーサルデザイン啓発、映画「ランニング・フォーエバー」制作、和歌祭復活支援

以上について講師や兵庫洋大参加者から事業内容が説明された。



②わかやま スペース カフェの進行

第1ラウンド（20分）テーマについて探求する

飲み物やお菓子を各自取って4人（又は5名）ずつテーブルを囲み、テーブルホスト1名を決めてから、テーマ（問い）「今、私たちにとって社会に貢献するためにどのような事後活動が必要でしょうか？」について話し合い模造紙に書き込んだ。



第2ラウンド（20分）アイデアを他花受粉する

各テーブルにテーブルホストだけを残して他のメンバーは旅人として別のテーブルに行く。各テーブルメンバーが新しい組み合わせになったので、まず自己紹介し、テーブルホストは自分のテーブルでのダイアログ（対話、対談、問答、会話）内容について説明した。旅人は移動前のテーブルで出たアイデアを紹介し、「あなたにとって社会に貢献できる事後活動とは何でしょうか？」を探求し模造紙に書き込んだ。

第3ラウンド（20分）気づきや発見を統合する

旅人が元のテーブルに戻り、旅で得たアイデアを紹介し合いながら「事後活動を通して社会貢献は実現できるでしょうか？」でダイアログを継続し模造紙に書き込んだ。

全体交歓（20分）集合的な発見を収穫し、共有する

カフェホストがファシリテーターになって、書き込まれたメモを広げ、参加者みんなでダイアログを展開し、今後の事後活動の理念として「和歌山大会宣言」案を提案することが話し合われた。



わかやま スペース カフェでのお作法

- 一、自分が大切だと感じていることにフォーカスを当てましょう！
- 一、自分の考えと経験に基づいて進行に貢献しましょう。
- 一、理解するためにはよく聴きましょう。※発言者はトーキングオブジェクトを持ってね！
- 一、出たアイデアをつなげましょう。
- 一、パターンや洞察、深い問いに共に耳を澄ませましょう。
- 一、自分もみんなもワクワクした会話を楽しみましょう。遊びましょう！いたずら書きをしましょう！絵を描きましょう！お菓子は食べましょう！飲み物を飲みましょう！
- 一、カフェホストが手を上げたときは会話をやめましょう。

和歌山大会宣言（案）

私たちは、本州最南端の地で開催されたこの大会を通じて、グローバルな視野を持ち、自分たちの生活の地におのずから誇りをもつ自立した青少年育成の重要性を改めて確認しました。

そして、その実現のためにはIYEOの活動を通じて培った絆を基礎とし、青少年育成のための基盤組織を拡充し続けることを実行し、もって、全ての生命の未来のため、子ども一人ひとりが持つ主体性を大切に、宇宙観的な視点で「人は心」心の教育、思いやり、慈しみ、情を大切にする教えと育みを柱とする育成支援を体験をとおして実践することをここに宣言します。

平成23年11月27日 日本青年国際交流機構（IYEO）有志



記：高垣晴夫

◎懇談会

大会1日目 26日(土) 19:00~21:00 わかのうら

司会：小島朋樹 担当：長尾 進 新谷伊珠美 山本真梨子

- | | | |
|------------|---------------------------------------|--------------|
| 1. オープニング | 和歌山大会PRソング演奏 | なつお meets 南風 |
| 2. 主催挨拶 | 第27回全国大会和歌山大会副実行委員長 | 橋本 雅史 |
| 3. 来賓挨拶 | 和歌山市副市長 | 畠山 貴晃 |
| 4. 来賓紹介 | 和歌山大学副学長 | 帯野久美子 |
| 5. 乾杯挨拶 | 日本青年国際交流機構近畿ブロック幹事 | 芦口 正史 |
| 6. アトラクション | マグロ解体ショー
海友会 dance team 楽舞和による演舞披露 | |
| 7. 閉会 | 日本青年国際交流機構監査役 | 焼野嘉津人 |



なつお meets 南風



「へい、わ！♪」



司会 小島朋樹

分科会を終え、チェックインを済ませた後、おいしい料理と全国から集まった沢山のバラエティー豊かなチャリティー物産への期待の高まりの中、懇談会が開かれました。

オープニングは今回の大会のテーマソングを創ってくれた松本奈津子さん率いる「なつお meets 南風」による「ひかりのわ」(34ページ参照)の演奏。なんとも和歌山らしい、そして大会テーマである「紀の国から^{そら}宙へ」をイメージさせるほっこりソングに参加者全員、体でリズムをとりながら「へい、わ！♪」彼女の歌声で一気に会場は和やかなムードに包まれました。



第27回全国大会和歌山大会
副実行委員長
橋本 雅史



和歌山市副市長
畠山 貴晃



日本青年国際交流機構
近畿ブロック幹事
芦口 正史



副実行委員長、和歌山市副市長の御挨拶の後、日本青年国際交流機構近畿ブロック幹事による「頑張ろう日本！負けるな日本！」の掛け声とともに乾杯し、懇談会が始まりました。



和歌山は海、山に囲まれ両方の幸に恵まれています。参加者の懇談の場を盛り上げるべく、会場のホテルの自家菜園の野菜や紀州梅を使ったメニューに加え、マグロ丸ごと一匹の解体ショーをご覧いただきました。解体ショーが始まると、参加者はマグロを取り囲み、調理人さんの手さばきに感心しつつ、カメラに収める方も多く見られました。

海友会和歌山ブロックのメンバーを中心に結成された「海友会 dance team 楽舞和」が迫力のあるよさこいを披露しました。実行委員長の林祐司と海友会会長の栗山京子も息切れしながらも、よさこいの魅力を最大限に表現し、会場内を参加者と踊りまわり、大いに盛り上げました。



今回の全国大会開催県である沖縄から参加のみなさんによるPRタイムでは三線の音色と共に壇上に登場。沖縄の方言を交えながら楽しくアピールして頂きました。



今回、全国から物産展のためにたくさんの特産品、名産品をお持ち寄りいただきました。名産品のお菓子、高価なお酒、AKBのCDなど多種多様な物品が集まりその数300点以上。47都道府県全ての名産品が集まり、過去最大数の物産展となったこと本当に感謝しています。また、皆様のあたたかい気持ちをもってお買い上げ頂きましたこと重ねてお礼申し上げます。

パッケージを見ているだけでもワクワクするような品々、美味しそうな品々でした。買った方は、それぞれの地方の味を知ると共にその地方の空気を感じているのかなと羨ましく思います。すべての物品を無事完売することが出来ました。今回の収益金153,840円はIYEO東日本大震災復興支援募金に寄付させていただきました。



記：長尾 進 新谷伊珠美 山本真梨子

和歌山大会テーマソング

～ ひかりのわ ～

つながるわ 育むわ 輝くわ
ひかりのわ つながるわ このわ ひろげるわ このわ
無限につながる 地球にひろがる このわ (へいわ!)

ここに集まった人 ひとつの思いをもって
ここに来れなかった人も それぞれの場所で アイラブユー
梅の町から みかんの町から 美しい仲間求めて ひとつになろうよ

元気が出ない時は 君の顔を思い出す
今日もきっとどこかで その笑顔見せてるかな
つながるわ このわ ひろがるわ このわ
無限につながる 宇宙につながる このわ
北から南へ どこまでも遠く 続くよ
東から西へ 新しい仲間求めて (やっほ～)
ぼくからきみへ はじめましてのごあいさつ
きみからあのこへ みんなで手をつないでこ
それぞれの場所にいるときも きみの顔を思い出す
次にまた会える日には どんな話しようかな
つなげるわ このわ ひろげるわ このわ
無限につなげる みんなにつながる このわ
つながるわ 育むわ 輝くわ ひかりのわ

作詞・作曲：松本奈津子 1981年8月27日 和歌山県生まれ

短大卒業後、アコースティック・デュオ「うにゃっ2☆」を結成し、大阪市内を中心に活動。

2007年、ミニアルバム「ひとつ」を自主制作。2008年、水都大阪2009pre イベント「Love River」に出演。「より自然な暮らしの中で唄いたい」と2009年、地元龍神村に拠点を移す。

2010年、CD「sunshine」を自主制作「ナツオ」としてのソロ活動も始める。

音楽グループ「南風」と出会い「なつお meets 南風」で和歌山県内を中心に活動中。

自分らしく、ありのままの唄声で、みんなのHAPPYと楽しい音楽を探し求め、唄い続ける。

◎会場展示

大会1日目～2日目 26日(土)～27日(日) わかのうら前ロビー

担当：芝本和己 木村哲彦

展示内容

1. グローバル・フォト・パネル
2. IYEO東日本大震災復興支援活動報告（岩手県・宮城県・福島県）
3. 岩手県陸前高田市 東日本大震災の被害状況報告
4. ブルネイからIYEOへメッセージ
5. 台風12号被害状況 和歌山県報告

和歌山大会の開催中、メイン会場前ロビーにおいて会場展示を行いました。今年、私たちは東日本大震災・台風12号と想像もできない被害に遭いました。IYEO本部からグローバル・フォト・パネルやブルネイからの復興メッセージを、岩手・宮城・福島県のIYEOから写真や活動報告を、和歌山県海友会から台風12号の被害状況をそれぞれ展示することができました。

特に岩手・宮城・福島県のIYEOからの展示には

- 岩手県の被災状況や支援の様子など
- 宮城県石巻市立病院の医療スタッフ支援の様子など
- 「船と翼の会ふくしま」による「復興支援ぞうきんプロジェクト」など

復興のためにIYEOのみなさんが活動している取り組みを、ご覧頂いたみなさんや仲間たちに伝えることができたと思います。

全国大会にてこのような様々な活動展示ができ、みなさんと共有できたのも、派遣事業から育まれたネットワークのおかげで、改めて人と人とのつながりのすばらしさを感じました。今回、私は少しだけではありましたが、全国大会に関わることで、数多くの刺激をみなさんから頂き、自分自身がこれからどう生きていかなければならないかを考えるすばらしい機会になりました。最後に和歌山に来て頂いた方々に感謝申し上げます。



記：木村哲彦

◎表彰式

大会2日目 27日(日) 9:00~9:30 わかのうら

司会：岡本奈津美

全国大会2日目には日本青年国際交流機構表彰式が行われ、3名（うち開催地である和歌山から2名）が表彰されました。その方々からメッセージも頂きました。



海友会

第10回「青年の船」事業（1976年）参加者
山崎佳彦

人生を変えた第10回「青年の船」事業での54日間、日本人のものさしと世界のものさしの違いを実感し、日本の文化、伝統、日本人そのものについて問い直したその後の人生でした。

今我々は不況と言いながらもかつての日本人が経験した事のない、豊かで快適な生活をしています。そんな中、子供たちの基本的な体験の機会がとて少なくなっている事に気づき、「田んぼの学校」「夏休み自然探検隊」「芋茶粥ともちつきの集い」という企画を始め10年以上になりました。田植えひとつにしても生徒はもちろん先生方も初めてという今の状況で、反響の大きさに驚くと共に時代の変化を感じています。

活動をしている中で大事にしている事が二つあります、一つは「楽しい企画である」という事、もう一つはできるだけ多くの地域の人達をその活動に巻き込んでいくという事です。

今回頂いた素晴らしい賞を励みに、これからも次の世代に郷土の素晴らしさ、日本人としての誇りや文化、伝統を伝えていきたいと思えます。

海友会

第5回「国際青年育成交流」事業（フィンランド）
副団長（1998）
橋本雅史



「息をしているように」活動していきたいというのが私の目指しているところです。ところがまだまだ道半ばといったところで息切れもするし、時には酸欠になってクラクラもします。

今回は何十年も活動を継続されている先輩方と一緒に言う事で、少しこそばゆい感じの表彰となりました。「市民自立と参画」をテーマに、「まち」の課題に対して堂々と向き合ってゆくわかやま市民自治ネットワークは今年で13年、選挙時の公開討論会に至っては17年も継続している事に気づきました。多様な考え方が複雑に交差している「まちづくり」に取り組んでいるのですがこの活動の原点は「海友会」であり、青年海外派遣事業であることは紛れもない事実です。

これからも、当たり前のようにスイスイと諸活動に取り組んでいこうと思えます。



福井県青年国際交流機構
第13回「青年の船」事業（1979）参加者
増永淳子

私の福井元気宣言

「田中さん家へ 行ってくるから 寝て待っているんだよ」

IYEOの活動を本格的に始めたのは1992年第8回全国大会福井大会開催の決定からです。1989年の推進会議で正式決定され、平成2年田中会長（現田中参与）が私を副会長に任命したからです。（1979年の同期で、嫁ぎ先が同じ校区内です）

IYEOの集まりがあると保育園の長男を頭に3人の子供達は「いってらっしゃい 早く帰ってきてね」と布団の中で送り出してくれました。毎日いくつもの顔でがんばっていたからでしょうか主人も子供達も「また一つ仕事を増やしたな」ぐらいの感覚であったようです。

私は1979年に第13回「青年の船」事業に参加後、結婚しました。それまでの他の活動は終了し、IYEOの活動に行事毎に参画していました。看護師（当時は看護婦）、主婦、嫁、妻、母親と駒のような生活でした。しかし、福井県青年国際交流機構（当時は青友会）には活動に参画する女性は少なく結婚すると家庭を守り、活動に参画しない状態でした。

共稼ぎ率日本一の福井県ですから女性は兼業主婦となり自由な時間はとれなくなります。私も例外ではなく、家事育児をこなして出かける生活でした。しかし、既参加青年が活動に参画してくれて私も元気をもらっていたように思います。

2006年、会長となり女性3役で青年社会活動コアリーダー育成プログラムの地方プログラムの受入をしました。福井の女性も家庭の外に出てきてくれるようになってきました。私の福井元気宣言、そしてこの元気を日本中に世界中に分けてあげたいと思います。現在は地域間交流で公民館を拠点にして活動しています。今回の表彰で小さな積み重ねを認めていただけたようでとてもうれしく思っています。ありがとうございました。

◎東日本大震災及び

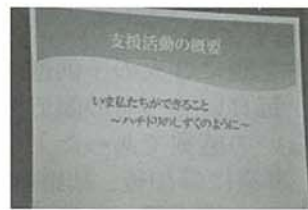
台風12号による災害復興支援活動報告

大会2日目 27日(日) 9:30~11:00 わかのうら

担当：田中美奈

◇IYEO東日本大震災復興支援活動概要報告◇

岩手県青年国際交流機構 副会長 松崎 俊



宮城青年国際交流機構 副会長 伊勢みゆき



船と翼の会ふくしま 会長 菅野裕子



陸前高田市副市長 久保田 崇





例年、全国大会2日目は海外派遣の帰国報告会がありますが、東日本大震災、台風12号に見舞われた今年は、被災地の状況や支援活動、復興に向けた取り組みについての報告が行われました。

皆さんの生の声をお聞きし、災害の凄まじさ、悲惨さを切実に感じました。そして、そのような状況の中、被災地の方たちが力強く復興への道を歩まれていることに心を打たれました。

岩手の「IYEO縁側カフェ」、宮城の石巻市立病院の支援、福島の避難所支援など、地域の方達に寄り添う支援活動や、陸前高田市の地元物産の活用、和歌山のボランティアによる泥かきなどの復興へ向けた取り組みの中で、印象に残ったことは、IYEOのネットワークを通じた物心両面での支援に、皆さん深く感謝の言葉を述べられていたことでした。

報告を聞いたあと、参加者が各自感じたことを紙に書いてボードに張り出しました。今後このつながりを大切にして支援の輪を広げ、一日も早い復興につなげたいという思いを共有できた報告会でした。

記：田中美奈

それぞれ感じたこと、明日へのメッセージ

- ・ 絆
- ・ 調整力、継続
- ・ がんばろう日本！！
- ・ 10年関与し続ける。
- ・ 中部で住んでいるとテレビで知る情報がなく、復興は進んでいるのかと錯覚してしまうのですが、実際はそうではなく様々な人の知恵と労力で進んでいることだと思いました。
- ・ 東北三県のお話はまるで自分が今、その被災した現場にいて被災したかのような大変生々しい内容でした。10年、20年、「2011. 3. 11」を忘れないようにしたい。和歌山のお話の最後に「日本の“復興”はお家芸」という言葉に感銘を受けました。
- ・ 大喰いの私、被災された方のことを思い、今すぐ気をつけます。
- ・ 東北、日本、和歌山、がんばっぺ～ THINK POSITIVE
- ・ 今まで被災地と住んでいる所が離れていたため、どこか客観的に見てしまっていた自分がいました。IYEOの方々の活動についてうかがい、こんなに困っている人がいるなら、何か自分にできることはないか、改めて問い直しています。とりあえず、被災地ツアーには参加します。
- ・ 今回の報告を聴き、大変想像以上に思いました。何とか少しでも継続して支援していきたいと思いました。
- ・ 届けているものは“モノ”。全世界、全国の人々の想いを届けている。
- ・ 今、話を聞いて自分には何が出来るかを考えた時に、何が出来るかが分かりませんが、小さな事の積み重ねが大切なような気がします。身近な家族、姉妹や先祖などを大切に、これからの人生を送っていき、今の生活を感謝して毎日を暮らしていきたいと思います。
- ・ 『復興は日本のお家芸』という言葉に大いに激励されました。今後も支援と見守りを続けたいと思います。
- ・ 物の支援も大切だけど、心の支援は最も大切。人と人とのつながり（絆）を大切に！
- ・ まずは震災や和歌山集中豪雨で被害に遭われた方々にお悔やみ申し上げます。被害もさることながら、人々の意識の変化があったと思います。地域のネットワークやつながり等、様々なことを感じる事ができた報告会でした。がんばろう東北、がんばろう日本と言われていますが、世界でも災害にあわれた方々のことも思いながら復興に向けての支援ができればと思います。様々なことを感じた報告会になりました。
- ・ 國破れて山河有り
- ・ 継続していく
- ・ 心のつながり心の温かさの大切さを改めて実感。みなさん（IYEO）は地域の、日本の、世界の希望であり、輝きです。ありがとう。
- ・ 他人事ではない、自分のことと想って支援をする。人々の気持ちを忘れずに頑張っていく！

- ・ 災害に遭われた方々が多い中、それでも各地の力強くいきいていこうという声が聞けて大変感動させられました。災害に見舞われたその日が、良くも悪くも変化のあった日。復興の節目であるというのが印象的でした。
- ・ 支援を目に見える形で行うことができる I Y E O のネットワークは貴重だと感じた。10 年間、忘れずに心を共にしていきたい。
- ・ 想い続けること、忘れないことが一番大切。
- ・ 東北三県（岩手、宮城、福島）の方々立ち上がって前進して下さい。私も日々エコ生活を続け共に歩んでいきます。決して忘れずに応援し続けます。
- ・ 失ったこと、辛いことから、学ぶことがあって、その中に可能性があって、それを創造し、具現化していく力があると思っています。
- ・ まだまだ時間のかかる問題。地域ごと、時期ごとにニーズも変化してくるので、常に連携をとりながら協力していくことの重要性を改めて感じた。地元の方たちには、報道では扱わない情報の発信を今以上にお願いしたい。
- ・ 東北はこのままでは終わらないという思いが強く感じられる！
- ・ 朝日は必ず昇る。日本は強い意志でこれまで幾度も困難を乗り越えてきたのだから大丈夫。一人一人の小さな努力が大きな結果につながるはず。Never Give Up!
- ・ 自分ができることを少しずつでも行うこと。今日知ったことを伝えていくこと。それが大切だと思いました。マスコミ報道が少なくなっても、忘れていくのではなく、今は何が必要か考えること、それが大事だと気付かされました。
- ・ 各県 I Y E O の皆さんのそれぞれの取り組みが具体的に分かりました。I Y E O でつちかった「多文化共生力」を自己の周りのコミュニケーションや地域復興へいかすことの大切さ。
- ・ マスコミなどでは聞けなかった生の声に涙が止まりませんでした。九州にいと日々東北や被災に遭われた所のことが薄くなっています。まずは今日の報告を身近な人に一人でも多く伝え今後も心を傾けていきます。冬本番の前にみなさまの心身が心配です。どうぞ大事に。
- ・ 近いうちに被災地に入りたいという気持ちが固まりました。また、長期の活動をしていこうという決意につながりました。
- ・ 東北の状況ばかりが目がいっていたが、和歌山の台風もそれに負けず劣らず悲惨なものだった。I Y E O という非常に大きく多岐にわたるネットワークを生かして、自分自身も支援に関わっていきたくて考えを新たにしました。
- ・ 現地に行き、また本日のお話を伺い、復興への道のりの長さを実感。風化させない取り組みを自分なりに行う。
- ・ もっと I Y E O を活用するぞ！
- ・ 「生きている」ことに感謝すると共に、「生かされている」者としての使命を強く感じた。
- ・ 今まで震災に関して、正直あまり関心がなかった。3月11日は海外にいたことや4月から仕事のために関西で働いていたため、同じ日本でもどこか遠い国の話のように思っていた。しかし、今回の講演には自分の胸を打つものがあり、聴講できて本当に良かったと思う。
- ・ I Y E O の皆様の絆の強さを改めて感じ、この継続の大切さを新たに致しました。（新婚旅行の地において）
- ・ 一人ひとりの生活が一日も早く良くなりますように。支援を続けよう。
- ・ ガンバレ東北！誰の為、何の為を考えながら行動するやってみてから考えよう。忘れません3.11。細く長く活動を。
- ・ 自然災害の恐ろしさを実感。聴き乗り越えるには人の力、協力、ネットワーク、コーディネート力の大切さを再確認した。I Y E O にはそれを実践するノウハウや人脈があるので、これを大切にしながら今後の活動を広げていきたい。
- ・ 今後も一歩ずつ歩んでいきましょう。想いは一つです。笑顔で未来を。
- ・ 東北三県の津波被害の悲惨さが強烈に伝わった。食糧不足、米が食べたい、石巻市立病院の被害の大きさに愕然として新聞報道で見られないことを知った。I Y E O の絆、ネットワークの重要性、ありがたさが身にしみた。今後とも築いたネットワークを大切にしたい。
- ・ 震災から半年以上経ても、まだ「片付け」の最中という被災地の現状。徐々に減っていく報道と共に、忘れかけている自分に気付かされた。「忘れないでいること」の難しさ、これから長い時間自分でできる支援は何なのかを改めて考える機会となった。
- ・ 被災地では普段自分が触れることがないような状況や支援活動が行われていて、もっと現場を知った上で行動につなげていかなくてはならないと思った。
- ・ ローカルからグローバルへ、グローバルからローカルへ。相互の支え合いが絆を深め、未来へ向かって前進。
- ・ 本日は貴重なお話をありがとうございました。夏までは子ども達の学習支援をささやかながら行っていたのですが、少しずつ日常にかまけて、震災のことを忘れていっている自分に愕然としました。「忘れないこと、細々でも続けること」を胸に行動していきたいと思えます。
- ・ 「失ったものは、元には戻らない」という言葉が胸にずしっときました。地震、津波、台風と大きな災害が人々を襲いましたが、それでも私たちが生きる世界は美しい。未来を信じてみんなでこの世界を守っていきたくてですね。
- ・ 「復興は日本のお家芸」と和歌山の方が言ってらっしゃった言葉にとても共感しました。本当にそうだと思います。頑張ろう！起こってしまった事実は仕方がない、テレビなどでは知ることができない仲間目線の現状を知ることにより、さらに悲惨さを身近に感じ、改めて前へ進んでいかなければ…と感じました。今後、もっと積極的に支援に取り組みます。
- ・ 現地に入らないと判らないこと。それが重要。
- ・ 8カ月たった今でも大変な状況がわかった。これからもみんな一緒になって、気持ちをひとつにして頑張っていかなければと今まで以上に強く思いました。
- ・ 子どもたちを守る人間に。まずは自分になることを目指したい。
- ・ 災害はいつくるかわからない。身近な人物も突然なくなってしまふ。一日一日を大切に、そして備えも大切にしたい。
- ・ 埼玉 I Y E O でも被災地訪問ツアーを実施したい。やりたいと思った！
- ・ 「忘れない」やはり現状を見た、見ないでは大きく違うと思う。私も始めはためらいがあったが行ってよかった。みんなの笑顔のために何ができるかを自分なりに考えたい。そして実行へ！
- ・ ①“私たちにできること”をもう一度考えたい。②被災地三県は被災しながら大きな支援活動を継続的に今なお行っていること改めて再認識。
- ・ 東北地震は本当に自分にとってもショックでした。忘れずに一日でも早くもとにもどれるよう祈り、目をむけて行きたい。今回の大会、忘れられないものになりました。元気、やる気をもらって帰ります。ありがとうございます！
- ・ 震災の年に生まれた子どもと数年で20歳。あとに生まれて知らない子どもも増えていく中、今回の東日本大震災を後世に伝えていくことの大切さを改めて感じました。また、台風12号では奈良県天川村へボランティアで入りましたが、以前の美しい村の風景が失われ、大変心をいためました。
- ・ 報道で聞いたり見ている、やはり実際に体験した人の話はより臨場感があり、心が揺さぶられた。復興には長い道のりがかかるので、東北の方々は離れていると何も出来ないが東北の状況を忘れずにいたい。つらい大変な思いをした人には、その人にしかわからない感情があり難しいが、東北の人を寄り添う気持ちを忘れず、命や出会い、絆を大切にしたい。
- ・ 継続、I Y E O の力、できることをやる！
- ・ 人と人との助け合い、支え合いの力の大きさを痛感した。
- ・ 無理のない範囲で、明るく元気にネットワークを生かして！細く長く確実に。
- ・ 末永い復興支援を、小さな事からでも少しずつ続けていきたい！
- ・ 絆を感じます。「多様性」を感じ、認め合い、つながっていきましょう！

- ・ ネットワーク強し！人と人と国境を越えたつながりに感激。やっぱり「輪」ですね。
- ・ 思っています。自分に何が出来るかこれからも考えます。テレビや新聞からでは伝わらない、生の心の声を。今日は聞いたように思いました。
- ・ ①表面と裏の現実の違い。福島…郷土を離れなければならない悔しさを知った。県外へ移っても苦悩が続いている現実。社会の裏の冷たさを知る。
- ・ 日本経済は明日にでも崩壊するのではと言われています。経済の力は復興の力とイコールであり、被災を免れた国民は、それぞれの立場で努力することが被災地の支援となると考えます。
- ・ 東北三県、陸前高田、和歌山の現状を知れて良かったです。これからも忘れることなく、自分が出来ることを続けていきたいと思えます。ありがとうございます！！
- ・ 報道される情報は、やはり作り手の意図で選ばれている。I Y E Oで得た経験、I Y E Oならではのおネットワークでお役に立てることが具体的にわかって良かった。何かしたいと思っていても義援金としてしか関わっていなかったが、I Y E Oの支援活動に参加し、facebook で国内外の人が忘れないよう持続的に広げていきたい。
- ・ 今日、実際に被害に遭われた方のお話を聞いて、テレビや新聞などのメディアだけでは真実は伝わらず、やはり自分の目で確かめることが大事だと思った。自分はまだまだ知らないことが多すぎる。自分に出来ることをやっていきたい。
- ・ 災害で多くの方が亡くなり、生活基盤を失った。現場に様々な支援が行われ、また、現場でも様々な取り組み。そこに携わる人が何を考え、感じているのか、学び、考えることができた。悲しみの中にも希望を見だし、力を合わせて支え合い、復興に向かう姿、そして仲間との絆というのを深く感じ、一人一人の話の内容に心から感銘を受けました。
- ・ ボランティアの大切さ、必要性を感じた。新聞、テレビでも驚いたのですが、報告者からの話を聞いていて、涙が自然にでてきました。年金生活者では体力的に、人間の力が大切と思いながら、何も出来ないことが残念です。自然災害についてはボランティアの大切さ
- ・ 継続的な支援の重要性を感じた。オンデマンドの支援の大切さを感じた。
- ・ 東北大好き！ずっと応援していきます！！「多様性を認める」ことは、国際交流の時だけでなく、何か災害が起きた時も重要になってくることを強く感じました。日々の生活でも大切にしていきたい！
- ・ 10年後も忘れないでいたいと思えます。自分に出来ることを補足でも長く、継続していきたいと思えます。
- ・ ①被災地の現場を見て、考えることの重要さ②ネットワークのありがたさ③被災者の身になって考える思いの大切さ④「忘れない」という重みを知る。
- ・ 忘れないこと、継続的な支援
- ・ 周りの人への思いやり、気づかいを大切にしたい。遠くにいてもつながっているという思いを忘れず
- ・ 現地の声に耳を傾けること、知ること、忘れないこと。
- ・ 大変な状況は知っていましたが、自分に何か出来るのかを考えた募金しかなくて、とにかく、頑張ってください。
- ・ 東北三県、和歌山と復興活動に支援している生の声を聞いて感動し、改めてI Y E Oメンバーの素晴らしさを再認識致しました。がんばれ東北、そして和歌山！すばらしいひとときありがとう。
- ・ 今できることを見つけ、行動に移すことの大切さを実感しました。よっしい
- ・ 何の災害もない香川の人間です。情報を下さい。ひとつから行動したいと思えます。
- ・ 絆、ネットワークを生かして元気な日本を再生しましょう！今こそI Y E Oで養った力を、頑張れ日本！
- ・ 天地無常といいますが、人間は生き続けます。まけないで頑張ってください。私達も頑張ります。心をあわせましょう。お祈り申します。
- ・ 今も生活に苦しんでいる被災地の方々がいることを常に忘れないようにし、自分の生活スタイルの見直しや、出来る限りの支援活動を続けていきたい。
- ・ 知る、感じる、忘れない。とても大切なことなんだと思いました。
- ・ まだまだ東北では支援を求めているということで、実際の現状があまり分からずにいたが、支援できることを探して続けていきたいと思った。
- ・ 「心はひとつ」という言葉で、支援活動を活発にしていきたいと思います。私たちにできる少しのことでも良いと思えます。「生命の尊重」というキーワードを忘れずに。
- ・ I Y E Oだからできる“支援の形”だなと感じました。これからもこのつながりを大切にしたいです。
- ・ 危機が訪れたときにこそ、絆や調整力の大切さに気付く、だからこそ、それは平時において一人一人が意識し、育んでいくべきものだと感じました。これからも県や世代を超えて協力体制を作っていきたいです。
- ・ 東北の被災地ばかりに目がいったが和歌山の台風被害もひどかったことがわかった。それぞれの地域で事情は違うが、長期的な視点で復興を支えたい。「忘れない」ことが大切だと改めて思った。
- ・ 首都圏に住まい、大災害の記憶が薄れつつある中で、現地の声を聞くことができた。今は長期支援の段階。10年間忘れないでいようと思う。そして被災現場を訪ねる。気持ちを共有したい。
- ・ テレビで得る情報ではなく、現場の声を直接聞ける機会を毎年作っていきたくと思った。自分が出向いても良い企画しても良い
- ・ 東北がんばれ！今日話を聞いて行く決意ができました。ボランティアなり家族と一緒に、2012年もこれからも忘れません。
- ・ 11月に石巻を訪問してきたばかりですが、今日の報告を聞いて、その時感じたことがよみがえりました。まだまだ長くかかる再生への年月を一緒に進んでいこうと思えます。
- ・ ニュースなどで報道される話を見聞きするより、現地の方の話を目の前で聞くと心に響く。
- ・ 絆（ネットワーク）～信頼。私が乗船した第20回青年の船の全体テーマでした。すでに25年経ちましたが、I Y E Oの活動を通じて全国、そして世界の絆を感じ、日々感謝し生活しています。何事も継続することは、とても労力のかかることと感じますが、青年の船でいただいた多くの絆を私なりに次へのものにつなげていきたいと思えます。
- ・ 遠くから現状を見聞きしてああ～大変だと思っていたが、真実はもっともっとひどいと思えた。だから長い支援が必要だと思う。ガンパロー！



まとめ：芦口正史

◎閉会式

大会2日目 27日(日) 11:00~11:15 わかのうら

司会：岡本奈津美

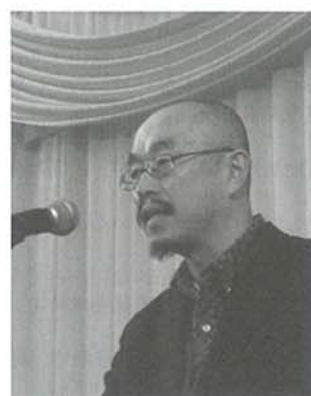
- | | | |
|------------|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 閉会の言葉 | 海友会会長 | 栗山 京子 |
| 2. あいさつ | 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長
日本青年国際交流機構副会長 | 伊奈川 秀和
佐藤 恵一 |
| 3. 大会旗引継ぎ | 和歌山大会実行委員会から沖縄大会実行委員会へ | |
| 4. 次期開催地挨拶 | 沖縄県青年国際交流機構会長 | 上江洲 利奈 |
| 5. 閉会の言葉 | 第27回全国大会和歌山大会実行委員長 | 林 祐司 |



海友会会長
栗山 京子



内閣府子ども若者・子育て
施策総合推進室長
伊奈川 秀和



日本青年国際交流機構副会長
佐藤 恵一



次期開催地である沖縄への大会旗を引継ぎ、
固い握手を交わしました

◎和歌山大会を支えたスタッフ

実行委員会立ち上げから大会の準備、当日の仕事の風景です。

担当：芦口正史





◎地域理解研修

No.	コース名	内容	参加費	場所
①	和歌山市内散策	和歌山のシンボルと言え、和歌山城！徳川御三家のお膝元として栄えた城下町を見守るお城は、和歌山市民の誇りとも言えます。造られた時代ごとに、異なる工芸が見られる石垣の積み方や、石に刻まれた謎の刻印、無料開放されている動物園、紅葉などみどころ満載の秋の和歌山城を、語り部と共に歩きましょう。	1,000円 登城料、 交通費含む	和歌山城
②	熊野古道体験	2004年に世界遺産登録された熊野古道。かつて天皇や上皇もこの道を歩いて、熊野三山をめざしました。京の都から歩いて初めて海が見えたのが今回歩くルートです。藤白神社から御所の芝までの約2kmには、風光明媚な景色がいっぱい。世界遺産登録に取り組んだ小野田真弓さんと共に祈りの道を歩いてみませんか。	500円 交通費含む	藤白神社
③	和歌山文化体験	伝統的な町並みが残る海南市黒江地区で、特産の紀州漆器を体験。築150年の古民家で上品な色合いの漆器に囲まれながら「世界に一つだけの漆器を作り上げてみませんか！？また体験後は和歌山人がこよなく愛する日本酒「黒牛」を造る名手酒造を訪問。温故伝承館ではお酒の試飲（有料）もできます。	2,200円 体験料、 交通費、 入場料含む	海南
④	高野山参拝	標高約900メートルの霊場は地上と平均気温が約5度低く、静かな空気が日ごろの忙しさを忘れさせてくれます。大会会場から約2時間かけてバスで移動し、現地では金剛峯寺と奥の院を見学。ユニークな形をした企業墓地や大河ドラマで有名なお江さんの墓があります。午後4時、南海高野山駅で現地解散です。	2,500円 交通費、 参拝料含む	高野山

①和歌山市内散策 めざせ！和歌山天守閣

大会2日目 27日(日) 13:00～

担当：鈴木保奈美 田中直視 岩元理津子

■見学地：和歌山城

所在地 〒640-8146 和歌山県和歌山市一番丁3

電話番号 073-422-8979

紅松庵(茶室) 和歌山公園 紅葉溪庭園内

電話番号 073-431-8648

和歌山城HP <http://www.city.wakayama.wakayama.jp>

■参加人数：5名

■ねらい：語り部さんのガイドを楽しみながら和歌山城を散策する

まずは和歌山県指定天然記念物の大楠や伏虎像を解説とともに見学した後に天守閣へ向かいました。天守閣に上る前には全員で集合写真も撮れ、良い記念になったと思います。天守閣を見学した後は、茶室紅松庵へ向かいました。その途中でテレビ「ナニコレ珍百景」でも紹介された「階段を登るように見える木」を見つけたり、紅葉を見渡したりと、楽しく歩くことができました。紅松庵では約20分間、良い雰囲気の中で会話を楽しみながら生菓子とお抹茶をいただきました。

みなさん写真を撮ることが好きだったので、景色、眺めの良い場所は特に喜んでくれたように見えました。しかし、天守閣にたどり着くまでに石段や急な坂道、階段など足下の不安定な道を結構歩くのでハイヒールを履いた方は少し辛そうでした。事前に、少々歩くということを伝えることができたなら良かったと思います。

全体的に好きな時に写真を撮ったり、気になる所で立ち止まったりできる、ゆったりとしたツアーになりました。歴史や城に興味がある人にとっては特に魅力的だったでしょう。そうでない人にとっても、交流を楽しみながら観光できる良いツアーになったと思います。

記：田中直視



②熊野古道体験 いのりの道「熊野古道」を訪ねて

大会2日目 27日(日) 13:00～

担当：高垣晴夫 久保知子 中原祐馬 山本倫子

■見学地：藤白神社 及び 熊野古道

所在地 〒642-0034 和歌山県海南市藤白466

電話番号 073-482-1123

海南市観光協会 HP <http://www.kainankanko.com/>

熊野古道ウォーキング MAP <http://www.wstv.jp/img/osusume/kumano.pdf>

■参加人数：38名

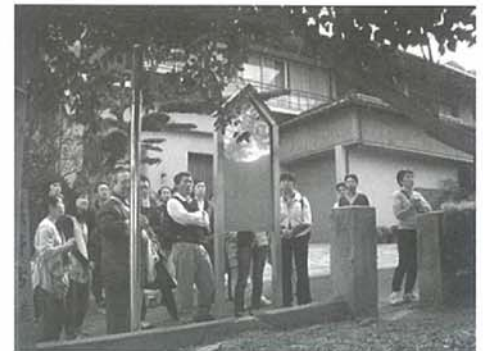
■ねらい：

世界遺産の熊野古道について知ってもらう

世界遺産である熊野古道を実際に歩いてもらい、自分の五感で熊野古道を体験し、その価値について考えてもらう。また、ただ歩くだけではなく、語り部さんと一緒に歩いてもらうことによってより深い歴史を聞くことができる。

□13:20ごろ ロイヤルパインズホテル出発

受付に手間取ってしまい、20分ほど出発が遅れてしまいました。バス内では、スタッフの自己紹介後、簡単に熊野古道や和歌山についてガイドを行いました。



□14:00ごろ 藤白神社到着

和歌山県世界遺産マスターである小野田真弓さん（分科会①の講師）と合流。



□14:10～16:00 熊野古道を体験

藤白神社・塔下王子間を往復。和歌山に来たからには熊野古道を歩きたいという方も多かったようですが、かなりの急こう配で体力のない方はとてもきつそうでした。参加人数が多いこともあり、予定時間より押し、最後はバタバタしてしまいました。しかし、山の上から見た景色はとてもきれいで、参加者の皆さんにも感動して帰っていただけたかなと思います。

記：中原祐馬

③和歌山文化体験 漆器の研ぎ出し体験&酒蔵見学

大会2日目 27日(日) 13:00~

担当：横井志保 岡本みなみ 渡部加奈子 上森成人

■見学地：黒江ぬりもの館

所在地 〒642-0011 和歌山県海南市黒江680

電話番号 073-482-5321

HP <http://kuroe-nurimonokan.jp/>

温故伝承館

所在地 〒642-0011 和歌山県海南市黒江846

電話番号 073-482-0005

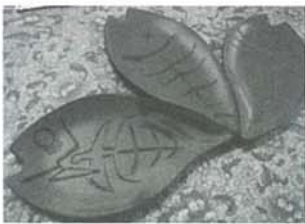
HP <http://www.kuroushi.com/onko/>

■参加人数：14名

■ねらい：

黒江での漆器体験や地酒の製造を通して、和歌山の良さを感じてもらおう

漆器の研ぎ出し体験では、和歌山にきた思い出を形として残してもらいました。また、和歌山の地酒として全国的に有名な「黒牛」の酒蔵の見学では、昔の人の知恵や工夫に触れることができました。



□13:15~14:00

黒江ぬりもの館にて漆器体験

漆器の日本三大産地とされる黒江で「根来塗」という、削って模様を描く珍しい手法を体験してもらいました。自分の発想次第でオリジナルの漆器ができるというだけあって、皆さん真剣に作業されていました。作品が出来上がると、他の人と作品を見せ合っていました。建物の1階は炭入りのスイーツや職人さんが作った漆器の売店があり、皆さんお土産を購入されていました。



□14:10~15:00

温故伝承館にて酒蔵見学

地酒の販売店の横に酒蔵の展示があり、昔使われていた道具や日用品の数々を見学しました。偶然お会いした「黒江おもてなし語り部」の方が説明してくださったので、どのようにそれらの道具を使っていたかをイメージしやすかったです。見学後は販売店に戻り、地酒のきき酒や梅酒などのテイスティングを大人の皆さんは楽しんでいました。

記：岡本みなみ

④高野山参拝 霊峰「高野山」で身も心も清らかに

大会2日目 27日(日) 11:30～

担当：小島朋樹 千田宗弘 小畑恵子 岡本奈津美 太田雅也

■見学地：高野山

所在地 〒648-0211 和歌山県 伊都郡高野町600

電話番号 0736-56-2616

高野山 HP <http://www.shukubo.net/contents/>



■参加人数：42名

■ねらい：

和歌山県で随一の観光地である高野山を訪ね、高野山について知っていただく

高野山の知名度はやはり高く、参加人数は、熊野古道と並んでとても多かったです。ホテルから約2時間かけて高野山まで行きました。長時間の移動、険しい山道で、参加者は疲れてしまうと思いましたが、バス内では楽しく話しておられました。バス内のガイドも、和やかな雰囲気の中で行われました。参加人数が多かった為、語り部さんを前と後ろに2人、つけていただきました。



□14:00～15:00 一奥の院一

奥の院では、一ノ橋から諸大名の墓石を通り抜け、神聖な雰囲気の中で奥の院に入りました。途中の杉に囲まれた道は、静かで、ひんやりとしていました。奥の院の中は荘厳で、参加者は息をのんでいました。

□15:10～15:40 一金剛峯寺一

その後バスで金剛峯寺まで移動し、お茶と和菓子を各自いただきました。壮大な金剛峯寺の内部で、歴史を感じられました。



時間が少し足りなかったのが残念でしたが、高野山駅での解散の際、「楽しかったです！」というお言葉をいただき、とてもよかったです。

また、バスの中でも、参加者同士で仲良くなれたようで、こちらとしても嬉しかったです。今度はぜひ、ゆっくりと時間をかけて高野山に来ていただきたいと思います。

記：小島朋樹

◎保育ルームについて

担当：赤松幸江 前田晶美

実行委員会では一時保育について話し合い、様々な意見が出たなかで、最終的には、外部委託となりました。実行委員会でも補助しましたが、利用された方の金銭的な負担が大きくなってしまいました。(委託先：NPO法人 WACわかやま)

私にも3歳の娘がいます。その分、小さいお子さんのいる家族も参加しやすいようにと広島から始まった思いを是非つなぎたいと考えていました。しかし、広島・埼玉と続いた思いのバトンをよりよい形でつなげることができませんでした。



和歌山大会での一時保育利用は1名でした。このことからもすごく利用しにくかったかもしれません。

まず、保育ルームの設置についての広報が不十分でした。ブログでお知らせはしましたが、申し込みをされる前に、一時保育の設置を知ることは難しかったと推測します。そこで、お子さんとともに申し込みのあった方には、受付担当者が電話で一時保育の有無を確認しました。

また、ブログでのお知らせ内容は、一時保育の事前申し込みをお願いする案内のみでお子さんと過ごすのが学生なのか、実行委員メンバーなのか、有資格者なのか、また費用負担についても全く触れられず、分かりにくかったと思います。

利用は1名でしたが、この和歌山大会にお子さんとともに参加してくださった方は他にもいらっしゃいました。そこで、私はこんなふうに考えます。

一時保育を受け入れる場合は、やはりあった方が喜ばれると思います。費用負担なく利用できれば、よりいいなと思います。それとともに、小さいお子さんも一緒に参加しやすい体制作りもあると心強いなと思います。

なぜなら、一時保育を利用することは、年齢の小さいお子さんにとっても、保護者の方にとっても、初めての場所で離れることは精神的な負担となるからです。

お子さんと一緒に参加しやすい分科会の設置などのアイデアも挙がりましたが、今回は実現できず残念でした。できれば、一部の分科会だけでなく、全ての分科会や基調講演などをお子さんとともに参加しやすい体制(会場内にお子さんも安心して過ごせるコーナーの設置など)ができればいいなと私は考えました。



記：前田晶美

◎和歌山大会検討の記録

担当：久保文子

大会まで、主にメールを活用し会議が円滑に進む様、各担当が個々に動いていました。全体としては月に1回会議を行い、全体会議の前後の週に役員会議（実行委員長・副実行委員長・事務局・会長）を毎月2回（第7回会議以降）行っていました。各会議での決定事項などはデータ化、MLで発信し、出来る限り実行委員全体で共有していました。

検討を進めた経過の概要は下記の通りです。

日付	項目	内容
12月29日	ホテル下見	ホテル・分科会・二次会会場等下見 関係者顔合わせ
1月29日	第1回実行委員全体会議	テーマ・タイトル、正副実行委員長決定
2月13日	第2回実行委員全体会議	分科会案・基調講演講師候補を検討
3月13日	第3回実行委員全体会議	
4月10日	第4回実行委員全体会議	
5月8日	ホテル下見	ホテル・分科会・二次会会場下見・打合せ
	第5回実行委員全体会議	分科会・基調講演について仮決定
5月15日	第6回実行委員全体会議	分科会案新意見登場 再検討
6月19日	第7回実行委員全体会議	主な役割・担当発表 分科会決定 地域理解研修案検討
7月17日	第8回実行委員全体会議	地域理解研修決定 開会式・懇談会、物産展・募金・東北の写真展等検討
8月21日	第9回実行委員全体会議	ロゴ、オープニング・懇談会内容決定
9月18日	第10回実行委員全体会議	帰国報告会・広告、募金について検討
10月10日	第11回実行委員全体会議	テーマソング完成 当日パンフレット、広報活動について検討
10月29日	第12回実行委員全体会議	当日の流れ・担当発表
10月30日	高野山下見	高野町長に挨拶、奥の院・金剛峰寺下見
11月13日	ホテル下見・決起集会	当日スタッフのホテル下見 その他打合せ
11月20日	ホテル打合せ	会場セッティング等最終打合せ
	第13回実行委員全体会議	当日の役割・担当、流れと動き最終確認
11月26日 ～27日	大会当日	250名参加 (参加者・来賓・講師・実行委員等を含)

<主な打合せの回数>

- ・実行委員全体会議：13回
- ・役員会議（実行委員長・副実行委員長・事務局・会長）：11回
- ・事務局会議（実行委員長・事務局）5回
- ・ホテル下見・打合せ：4回 ・トップツアーとの打合せ：11回

◎アンケート結果・評価

担当：芦口正史

●回答をいただいた方 61名（男性：24名 女性：37名）

●年齢

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
1	17	22	10	7	4	0

●参加地域（無回答 3名）

北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	その他
6	14	9	14	7	8	0

●参加事業（無回答 2名）※重複あり

一般	東ア船	世界船	青年の船	コア	育成	日韓	日中	航空機	その他
2	13	19	5	1	3	6	7	5	2

<主なその他の意見> 都道府県単独事業

●大会のプログラム評価（評価 低1 から 高6）

①大会全体を通じた評価（無回答 1名）平均 5.27

1	2	3	4	5	6
0	0	2	4	30	24

②基調講演の評価（無回答 1名）平均 5.38

1	2	3	4	5	6
0	0	0	7	23	30

③参加分科会（無回答 1名）

熊野古道	トルコ	鯨	たま駅長	干潟	自然エネ	防災	事後活動
19	7	6	9	5	3	10	1

④分科会の評価（無回答 2名）平均 4.49

1	2	3	4	5	6
1	3	7	17	17	14

⑤懇談会の評価（無回答 3名）平均 5.21

1	2	3	4	5	6
0	0	1	7	29	21

⑥ 27日の活動報告評価（無回答16名）平均 5.58

1	2	3	4	5	6
0	0	0	4	11	30

⑦ スタッフの評価（無回答 3名）平均 5.48

1	2	3	4	5	6
0	0	2	5	14	37

● 大会プログラムについてのコメント

良かった点

- ・ホテル、施設がよかった。
- ・時間もゆったりでよかった。
- ・懇親会の歌や踊りが手作り感でよかった。
- ・基調講演がよかった。
- ・分科会で貴重な話聞けてよかった。
- ・「参加者と共に」を意識したものでよかった。
- ・懇親会でゆっくり話が出来てよかった。

改善点

- ・挨拶が長かった。
- ・海外の青年も参加出来るような工夫を希望。
- ・会場移動に時間がかかった。
- ・次のプログラムに移動する説明をもっと丁寧に。
- ・分科会で話し合ったり参加する部分があってもよかった。
- ・体験ものがあったほうがよかった。
- ・分科会で隣の声がうるさかった。
- ・内容がむずかしかった。
- ・分科会時間が短く残念。
- ・懇親会、2次会で立ちっぱなしは辛い。

● 参加理由（無回答 3名）※複数回答

定例会だから	再会を楽しみに	開催地に魅力	プログラムに魅力	その他
40	21	16	13	16

<主なその他の意見>

- ・基調講演に魅力。
- ・分科会に魅力。
- ・震災支援に絆を感じたから。

● ブログについて

知っていた	知らなかった
44	17

●知っていた方44名中 (無回答 2名)

見なかった	動機付け	意味無	その他
19	16	1	6

<主なその他の意見>

- ・がんばっているので参加しようと思えた。
- ・最近の動きを確認できてよかった。
- ・情報確認に利用。
- ・すでに参加を決めていた。
- ・長文は読み辛い。
- ・もっと更新頻度を。

●大会のテーマにそったプログラム作り? (無回答 3名)

なっていた	そうは思わない	わからない
48	1	9

●大会についての意見、改善点コメント

良かった点

- ・ありがとうございますお疲れ様でした。
- ・とても楽しい大会でした。
- ・若いパワーを感じました。
- ・分科会毎の受付に関心。
- ・実行委員の笑顔がよかった。
- ・スタッフ対応よかった。
- ・ホテルの対応もよく朝食はおいしかった。
- ・ブログの取り組み良い。
- ・復興支援活動報告よかった。
- ・無料温泉よかった。

改善点

- ・当初の時点でスケジュール詳細、交通手段を案内欲しかった。
- ・物産展も早めに広報してほしい。分科会の場所をプログラムに記載。
- ・ブログにももっと詳細を。
- ・早期申し込みのメリットがほしい。
- ・バスがわかり辛い。
- ・日程表に会場案内を乗せたもの掲示するかもっとスタッフ誘導が必要。
- ・荷物の置き場がわかりにくかった。
- ・はり紙等があまりされてなかった。
- ・全体スケジュールを掲示して欲しかった。
- ・時間や場所、チェックアウトインフォメーション等もっと必要。
- ・会場の移動が多い。
- ・マイクや拡声器あれば。
- ・分科会の時間が短すぎてよくわからなかったのと質問時間がすくなかったのが残念。
- ・懇親会いす多めにあればよかった。
- ・2次会持込みなのでもっと安くしてほしい。
- ・外に出るプログラムは雨天では困る。

◎協賛いただいた企業・団体・個人の皆さま

- ・商船三井客船株式会社 様
- ・キューブ建築研究所 様
- ・和歌山高齢者生活協同組合 様
- ・人まちファシリテーター工房 様
- ・楠不動産 様
- ・ふくろうの湯 様
- ・有限会社さわぐち 様
- ・コアラ保険パートナーズ株式会社 様
- ・株式会社ヤマトクリエーション様
- ・有限会社富士シール 様
- ・ロイヤルパインズ株式会社 様
- ・三上陽子様
- ・和歌山県BBS連盟 様
- ・井端俊二 様
- ・永井俊子 様

(順不同)

ご協賛いただきまして、ありがとうございました

◎あとかぎ

「ああ、やっとあとかぎまでたどり着いた～」というのがまず初めのあとかぎに寄せる思いです。「おうちに着くまでが遠足です！」と同じ、「報告書がちゃんと出来上がるまでが私たち和歌山の全国大会です！」という気持ちを忘れずにこの報告書を作成しました。

私の海友会歴は今年で7年目ですが、実は未だ派遣事業に参加したことがありません。高校の時に1年間、アメリカに留学経験があり、その時にさまざまな体験をしました。つらい思い出の方が多い1年間だったので、学校から帰ってきた私を毎日温かく迎え入れてくれたホストファミリーには本当に感謝しています。今、私は海友会で主に地方プログラムで西牟婁を訪れる海外青年団のホームステイのお世話をさせてもらっています。毎回、ホームステイ最終日に別れを惜しむ青年とホストファミリーの姿を見るのが大好きです。「ああ、また国や人種を越えて“人が人を想う気持ち”が生まれたんだなあ。」と熱いものがこみ上げてきます。

去年は世界的にみても地震と台風による水害の多い年でした。特に東日本大震災の被害の様子は世界各国のメディアでも大きく取り上げられました。日本を代表して他国に派遣されたみなさんのもとには派遣時に知り合った現地の方々から様子を伺う連絡が寄せられたと思います。また他国で何か災害があった時は、そこが少しでもお話をした方、関わった方の出身国であったら、その方を想い、心配するでしょう。そういう、“人が人を想う気持ち”をIYEOの活動はより強いものとし、人の気持ちを考えた行動へと移す活力になるのだと私は考えます。

受け入れる側のスタッフではなく、派遣事業に参加してこの“想い”をより一層育み、事後活動につなげたいと思っています。応募資格のある年齢までには必ず。

最後に和歌山大会を支えてくださったすべてのみなさまに感謝し、この場を借りてお礼申し上げます。

記：山本真梨子